

第2編（実践編）

～「いわての復興教育」

／教育活動の実際～

事例提供校	概要	ページ
事例1 一関市立室根西小学校	生活圏である隣町の気仙沼市吉本小泉地区の方々が、学区に避難してきた。児童会を中心として地域ぐるみの支援、交流の様子を報告している。	26
事例2 北上市立黒沢尻東小学校	被災地区の復興への動きを伝える新聞記事を教材として授業のねらいに迫るとともに、夢と希望を持ち、たくましく生きる姿にふれさせている。	28
事例3 盛岡市立城南小学校	支援活動や報道機関からの情報をツールとして、震災からの生活を振り返り、座談会形式で考えた事を伝える授業実践である。	30
事例4 山田町立大沢小学校	地域の7割が被災したが、自分のふるさとを愛し、未来に希望を持てる児童の育成を願い、総合単元を見直し新たな単元を開拓した実践である。	32
事例5 花巻市立花巻北中学校	震災を受け、生徒にこれからどのように生きていくのかを考えるために全校集会、支援システム・学校間交流、避難訓練等の実際である。	34
事例6 釜石市立釜石東中学校	校舎が全壊し、間借りしての学校生活スタート。防災ボランティーストの見直しをはじめとした、今年度の元気な防災教育プランである。	39
事例7 軽米町立軽米中学校	復興を目指す人や社会とのかかわりを通して生き方を考えるよう、震災津波に関連した内容を加味した計画を立案し、その実践の報告している。	40
事例8 一関市立大東中学校	これから生き方を考えさせるために、震災津波の恐ろしさを実感させる被災地訪問学習を計画し、生徒の思いを文化祭で具現化した実践である。	46
事例9 紫波町立紫波第一中学校	心のサポート授業Aタイプ（被災が比較的小さい地域向け）での指導の実際である。丁寧な取組は、心のサポートの参考となる事例である。	48
事例10 大船渡市立第一中学校	一夜にして景色が一変した状況を目の前にして立ち上がった一中生の足跡である。希望新聞・メッセージDVDと生徒の思いが詰まっている。	50
事例11 県立一戸高等学校	被災地支援の活動により、被災地の理解とともに、自分に何ができる、何ができないかを知ることをねらいとした、災害復旧活動の報告である。	52
事例12 県立盛岡第三高等学校	内陸部の高校生による震災ボランティア活動についての報告である。生徒会が中心となって企画し、延べ100数十人が参加した。	54
事例13 県立宮古北高等学校	内陸の学校による沿岸サポート事業、不來方高校との交流の様子である。この交流を一過性のものにせず、今後も続けていきたい。	56
事例14 県立釜石祥雲支援学校	心理的不安を抱える生徒や保護者に対して、「笑顔と感動が生徒の活力」を確認しながら継続的に取り組んでいる支援の報告である。	58
事例15 県立宮古恵風支援学校	スクールバス移動中の地震（津波警報発令）発生に備え、従来のマニュアルを見直し、改めてスクールバス避難訓練を実施した報告である。	60
事例16 県立気仙光陵支援学校	全校の4割強の生徒が大きな被害を受けた中、震災直後に支援物資や応援メッセージを寄せてくれた神戸市立青陽東養護学校との交流の様子である。	62

他地区 との交流	関連	絆⑨共感・支え合い 被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる
-------------	----	--

一室根西小学校の取組ー

- 校長による被災地の様子説明
- 児童会を中心に地域ぐるみの支援活動
- 被災者を招待しての運動会の実施
- 学区内にある避難所を訪問しての交流
- 学習発表会での震災をテーマにした演劇発表

校長先生プレゼンテーション

「地震や津波に負けてはいられない。思いやりの心（絆）と努力の心を發揮して、どんどん明るい温かい未来を切り開いていこう。」



被災地である隣町の気仙沼市や陸前高田市、唐桑町、避難所の陸前高田市立第一中学校を訪問し、そのときの思いを低学年用・高学年用（各40分）のプレゼンテーションにまとめ、特別授業を実施。

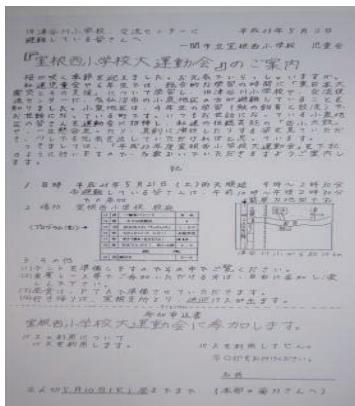
物は壊れるけれども、心は経験と共に輝き続けていくものです。被災された方々の気持ちを考え、思いやりの心を發揮し、努力の心で明るい未来を切り開いていこう。手を取り合い、共に歩んでいこう。

【子ども達の感想から】ぼくは昨日、お母さんから「ふろ掃除をしなさい。」と言われて、「ぼくは昨日やったよ。」と言ったけど、お母さんの言葉の中に、「被災地の人たちはふろなんか入れないんだから」という言葉を思い出しました。よく考えてみたらそれもそうです。被災地の人はふろに入れない人もいると思います。ぼくは、今日からちゃんとふろ掃除をしたいです。今日のプレゼンを聞いてそのことを思い出しました。この生活がどのくらい幸せか分かりました。

運動会へ招待 テーマ「心を一つに 勝利をめざせ！」

①手作り案内状＝学区の避難所（旧津谷川小学校・交流促進センター）で生活している方々へ

旧津谷川小学校の避難所には、気仙沼市小泉地区の方70名ほどが避難している。小泉地区には、4年生の学習（鮭の飼育と放流）でお世話になっている。いつもお世話になっている小泉地区の皆さんに、少しでも元気を出していただければと思い、児童会が運動会への招待を企画した。



「運動会に被災者の方を招待し、自分達と一緒に楽しんでもらおう、私達の一生懸命な演技や競技で被災者の方を元気づけよう。」

5月6日の夕方、執行部と津谷川の6年生で避難所に行きました。メッセージには、小さい頃本吉の海で遊んだことや、買い物をした思い出の他に、復興を願ったメッセージを6年生全員で模造紙6枚に書きました。ババロアとアクリルたわしは、おやつは食べていないだろう、洗い物は困っているだろうと里莉さんがつくったものです。避難所に入ると被災者の方は食堂に集まっていました。まず、初めて室根にきた人のために室根山や室根大祭について紹介し、応援メッセージとババロアを渡しました。そして、一人ひとりに声をかけながら手作りの招待状を配りました。...一略...（6年男）

②背中に貼った大きなメッセージ

運動会当日に、5・6年生全員が、背中に貼った大きな応援メッセージ。被災者の方は目頭を熱くしていた。心から心へ、子ども達の真っ直ぐな思いは確かに届いた。



③運動会当日

第3回大運動会

5月21日（土）



【招待された方々の声】

- 「震災がなければ地元でも運動会シーズン。弁当作りや場所取りなど思い出しますね。震災の影響で今年は中止とのことで残念。室根西小学校に負けない運動会ができるよう早く復興したい。」
- 「室根の子どもたちからたくさんの支援をいただき、とてもありがとうございます。子どもたちからのエールに応えられるよう、（復興に向けて）頑張りたい。」

—広報いのせき No.138 (6/15) より—

昼食では、PTAをはじめ地域住民、ボランティアの方々が、地元の食材を使った郷土料理「カブふかし」やおでん、特産品のほうれん草のおひたし、リンゴムースなどボリューム満点のメニューを作り、振る舞った。被災者の方々は口々に「おいしい」と言い、残ったおかずを全部バスに積んでもっていかれたほどだ。この取り組みは自治会による秋の地区民大運動会にも引き継がれ、絆は更に深められた。

「心を一つに勝利をめざせ」の児童会スローガンのもと、旧津谷川小学校に避難している15名を招待し、チャンスレースや徒競走などで、児童、父母、地域住民と交流した。西小太鼓の後には、全校児童でエールを送った。

【児童の感想】



6年生のチャンスレースの時に、6組目に被災者の6年生の人が3人入るんだけど、その中の一人が光君を知っているよ、と先生から言われた時、小さい時大森山に登った友達がまだ覚えていてくれたのは嬉しかったです。西小太鼓の次には全校で被災者の方にエールを送りました。今年は西小にも本吉にも最高の運動会になったと思います。2008年津谷川小学校が閉校し、小泉との交流も絶えてしまいました。そして、2011年3月11日の大津波で小泉は大きな被害を受けました。ぼくは、小泉の友達が心配でした。でも小学校最後の運動会で小泉の友達が生きていて、しかもまた会えた時には今まで一番嬉しかったです。 —略— (6年男)



避難所への訪問と響き合い

6年生が避難所（津谷川交流促進センター）を訪問し、歌や踊りを披露 ←お返しのプレゼント



…日頃の疲れをいやせればいいなあと思い、「ふるさと」の歌や、おじいさん、おばあさんが好きな演歌、「マルモのおきて」のダンスを練習してきました。…自分たちで踊り終えた後、ゆっくりのペースで被災者の方にも踊ってもらいました。とってもいい笑顔でした。楽しんでもらって良かったです。最後にはみんなで「ふるさと」を歌いました。おばあさんが涙ぐんでいました。そして、帰る時一人ひとりと握手して帰りました。被災者の人たちに喜んでもらってよかったです。(6年女)



お礼に訪れた山内さん。
お返しのプレゼントをいただきました。

学習発表会「4年生一劇＜カキじいさんとしげぼう 2011＞ー」

震災についての学習「何が起こったか、どんな被害があったか、何ができるか」考えたことを伝える

毎年楽しみにしている「小泉川鮭増殖組合」での体験学習が、震災の影響で実施できなくなった。子ども達の残念がる声を受け止め、組合の方々は再開に向けて動き出した。そんな子ども達と先生が、作り上げた劇である。 **一明日に向かって歩いていくこと 忘れずに語りつぐこと**

—ナレーション—

みなさん、「カキじいさんとしげぼう」というお話を知っていますか。このお話は、今から7年前に、「森は海の恋人運動」の提案者、この矢越地区ともつながりの深い、畠山重篤さんによって書かれた絵本です。…さて、今年3月11日、わたしたちは千年に一度といわれる大災害に見舞われました。…私たち4年生は、1学期にこの震災について調べ、何が起こったのか、どんな被害があったのか、私たちに何ができるのかを考えました。今日は、「その後のカキじいさんとしげぼう」を演じながら、私たちが感じたことを伝えていきたいと思います。



社会科 第 5 学年	関連	命 ③どんなにつらいことや苦しいことにもかけず、夢と希望を持ち、たくましく生きていく強い意志と態度を養う 社会⑯身近な人の仕事や地域経済への震災による被害の様子を調べ、自然災害が与える影響について理解できるようにする
---------------	----	---

【単元】 食料生産を支える人々 1 農業のさかんな地域をたずねて

【ねらい】

稻作農家の人たちの思いや願いから、農業の魅力や米づくりの大切さに気付き、適切に表現することができる。

【復興教育の視点】

大震災によって、農家は相当な被害を被った。震災後の米づくりの困難に直面した農家が、どんな思いから米づくりを再開したのか。

指導では、県内農家についての新聞記事を紹介し、塩害にくじけずに米づくりを続ける農家の思いを読み取らせ、教科書の資料と新聞記事とを関係付けて、農家の思いを自分なりの言葉でまとめさせる。

【資料】 新聞記事 岩手日報 (H23, 5, 20/5, 29)

【指導計画】

第 1 時 米づくりのさかんな地域

第 2 時 南魚沼市の土地や気候

第 3 時 稲作農家の暮らし・環境条件

第 4 時 米づくりの工夫・努力

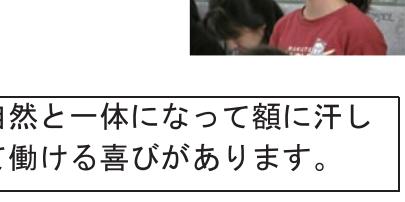
第 5 時 稲作農家の悩み・問題点

第 6 時 (本時) 稲作農家の人たちの思いや願い、魅力・大切さ



【授業の概要】

<本時の目標> 稲作農家の人たちの思いや願いから、農業の魅力や米づくりの大切さに気付き、適切に表現することができる。(社会的な思考・判断・表現)

段落	学習活動 指導の手立て	教師の働きかけ	児童の反応・活動
つかむ	1 本時の学習課題を確認する。	米づくりをしている人たちは、どのような喜びや願いをもっているのか	
深める	<p>2 教科書から米作りをしている人たちの思いや願いを調べる</p> <p>・米作りをしている人達の表情、稲の様子に着目させる。</p> <p>・該当する文にサイドラインを引かせる。</p>	<p>写真を見て、気がついたことをかきましょう</p> <p>稲の束を抱えて、とてもれしそうに笑っています。</p> <p>農家のお話が書いてある文から思いや願いを見つけましょう</p> <p>米を買った人から喜ばれてうれしい。</p>	   

<p>深める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・該当する文にサイドラインを引かせた後に、ノートに箇条書きで書かせる。 <p>3 塩害の被害を受けながらも、米づくりに励む本県の稻作農家の記事を読み、思いや願いを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見出しや会話文に着目させて、思いや願いを把握させる。 <p>4 教科書の農家と新聞記事の農家との気持ちの類似点を考えさせる。</p>	<p>これからの農業について大切なことは何だと思いますか</p>  <p>ノートにまとめる児童</p> <p>自分で考えて、工夫しながら農業をすることです。</p>  <p>新聞記事を読んで思ったことを発表しましょう</p> <p>被災した人達につくったお米を食べもらいたいと思っています。</p>  <p>お米づくりが、心の支えになっていると思います。</p> <p>教科書の農家と新聞記事の農家との思いや願いを比べて、同じところを見つけましょう</p> <p>お米づくりが、心の支えになっているところです。</p>  <p>たくさんの人にお米を食べてほしいと願っているところです。</p>
<p>まとめる</p> <p>5 今日の学習の振り返りをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・板書のキーワードを基に、自分なりの言葉でまとめさせる。 <p>6 次の時間の確認</p>	<p>米づくりは、悩みや問題点が多いが、食べる人が笑顔になるように、農家はけんめいに取り組んでいる。</p>  <p>新聞記事からどんなことを学びましたか</p> <p>県内の農家の思いをしっかり学んで学習に役立てることができました。</p>

<授業の様子>

- 児童は、教科書を読んで、農家の思いや願いを見付けて意欲的に発表していた。また、塩害に負けずにがんばっている農家の思いや願いを新聞記事から読み取った。そして、教科書と新聞記事に書いてある農家の話から、米づくりに対する思いや願いの共通点を見付けて、自分なりの言葉で表現できた。※社会科学習新聞参照

国語科 第 6 学年	関連	⑨被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる。 社会 ⑩災害で被害を受けた交通網や産業、住宅や街の復旧、復興の様子を調べ、災害に強いまちづくりについて理解できるようにする。
---------------	----	---

【単元】 座談会を通して意見を比べ、考えをまとめよう

～がんばろう岩手 岩手の復興を考える～

【ねらい】

〈関心・意欲・態度〉

- ・話題に興味をもち、友達の意見を参考にして自分の意見をまとめようとしている。

〈話すこと・聞くこと〉

- ・話の意図や内容を自分の意見と比べながら聞き、自分の考えをまとめることができる。

- ・複数の意見を関係付け、自分の考え方と照らし合わせながら意見を述べることができる。

〈伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〉

- ・討論における言葉の使い方について関心をもつことができる。

【復興教育の視点】

- ・3月の大震災からこれまでの生活を振り返り、一人一人が感じたことや今初めて思うことについて「がんばろう岩手～岩手の復興を考える～」という視点で意見を述べ合う。
- ・実際の討論では、「テレビや新聞等で知った被害や支援の様子、復興への歩み」「これまでに行ってきた募金活動や被災地の学校へのメッセージ」など、報道で知った事実や実際の体験から自分の考え方をもたせ、「復興への私の決意」を明確にさせる。

【資料】 新聞記事 岩手日報「津波でんでんこ」、復興への歩みを取り上げた記事のスクラップ

【指導計画】

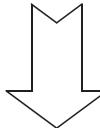
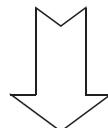
第 1 次 単元のねらいを知り、学習の見通しをもつ(1時間)。

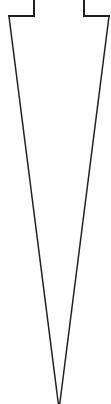
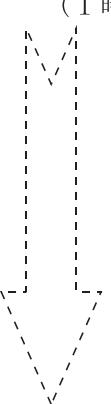
第 2 次 話題について自分の意見をまとめ、座談会を行う(4時間)。

第 3 次 単元の学習を振り返る(1時間)。

課 外 「復興への私の決意」をポスターにまとめ、全校に発信する。

【学習指導計画】(全 6 時間)

主な段階	主な学習活動	主な活用
第 1 次 単元のねらいを 知り、学習の見 通しをもつ (1時間) 	<p>1 被災地を訪問した人たちの座談会に参加して自分が感じたことをまとめ、単元の学習の見通しをもつ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>〈評価〉</p> <p>① 話題について興味をもち、単元のゴールに向けて見通しをもっている。</p> <p>《発言・ワークシート》</p> </div>	
第 2 次 話題について自 分の意見をまと め、座談会を行 う (4時間) 	<p>2 復興の歩みについて新聞記事を読み、自分の考え方の基になる事実やエピソードを集め、話題について自分の意見をまとめる。 話題「復興の歩みからわたしが感じたこと」</p> <p>3 第 1 回座談会を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞いた意見を調整すること、他の意見を関係付けて自分の意見を述べることを確かめる。 ・座談会を行い、討論の仕方を振り返る。 	

	<p>4 第1回座談会での討論を基に、再取材を通して自分の考えをもう一度整理する。</p> <p>5 第2回座談会を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回座談会で挙げられた課題を基に、討論の仕方を確認する。 ・座談会を行い2回の座談会を通して自分が考えたことをまとめる。 <p>〈評価〉</p> <p>② 新聞記事から自分の考えの基になる事実やエピソードを見付け、根拠を明確にして自分の意見をまとめている。 《ワークシート》</p> <p>③ 友達の意見を整理してとらえ、それと関係付けて自分の意見を述べている。 《座談会の様子・ワークシート》</p> <p>④ 討論で出された意見を基に、自分の考えを確かにしたり修正したりしている。 《ワークシート》</p> <p>⑤ 意見の共通点や相違点、新たに生まれた考えを整理し、自分の考えをまとめている。 《ワークシート》</p>	<p>前単元のディベートの学習で学んだ知識・技能を生かして話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主張の仕方 ・質問の仕方 ・意見の整理の仕方
<p>第3次 単元の学習を振り返る (1時間)</p>  	<p>6 単元の学習を振り返り、座談会後の自分の考えをまとめたり自分が学んだことを確かめたりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「復興へのわたしの意見」を書きまとめる。 ・話題についての振り返り（座談会を通して自分の考えはどのように深まったか。） ・討論の仕方についての振り返り（複数の意見を比べながら聞き、それに関係付けて自分の意見を述べることができたか。） <p>〈評価〉</p> <p>⑥ 討論の意義と複数の意見を関係付けて考えを形成していくことを理解している。 《ワークシート》</p>	<p>【他教科等・日常活用場面】</p> <p>○話合いにおける話し方、聞き方、進め方等を生かす。 (話合い活動)</p>
<p>課外 「復興への」わたしの決意」をポスターにまとめ、全校に発信する。</p>		

総合 第4学年 第5学年	関連	社会 ⑯救援活動で働く人々 救援活動で働く人々の様子について調べ、人々の生命や財産を守るために働いている人々の思いや組織的な取組について理解できるようにする。 社会 ⑲復興へのあゆみ 災害で被害を受けた交通網や産業、住宅や街の復旧、復興の様子を調べ、災害に強いまちづくりについて理解できるようにする。
---	-----------	---

4年生と5年生（一部社会科）の単元構成

1. 第4学年の実践

- (1) 単元名 「よみがえれ 大沢」 55 「ありがとうを届けよう」 15
 (2) 単元設定の理由

本校は、地域が7割被災し、これまでの活動がほとんどできなくなっている。そのような状況下でも、自分のふるさとを愛し、未来に希望を持てるような児童に育てたいという願いから、これまでの単元を見直し新たな単元を開拓することにした。

(3) 単元構成

「よみがえれ 大沢」 45 (総合33 社会12)

第1次 生活を守る人たち 12

- ・山梨県警の皆さんありがとう
- ・消防署の仕事
- ・避難所職員のお話
- ・支援物資はどこから

社会科の学習に合わせ、警察官や地元の消防士に、津波についてもインタビューした。学校が避難所となつたので避難所運営の話などを聞いた。支援物資について調べまとめた。

第2次 バリアフリーを考えよう 7

- ・点字を学ぼう
- ・キヤップハンディ体験

点字のメッセージをきっかけに、バリアフリーについて体験しながら学習し、町づくりに生かした。

第3次 葛巻に学ぼう 10

- ・電気は何から作られる？
- ・葛巻の町づくり

エネルギーだけでなく、地の利を生かした町づくりを山田町にも取り入れた。

第4次 提案します 夢の町 15

- ・計画を立てよう
- ・子ども復興会議の準備をしよう
- ・子ども復興会議
- ・提案します 夢の町

避難所職員だった町職員を再びゲストティーチャーに迎え、子どもたちの復興案にアドバイスをいただいた。

今年度できなかつた「海よ光れ」に代わる学習発表会で復興案を提案した。

→ (学習発表会)

第5次 学習を振り返ろう 1

「ありがとうを 届けよう」 15 3学期単元予定

第1次 今までいただいたありがとう 2

- ・様々な支援

第2次 ありがとうを届けよう 12

- ・ビデオレターを作ろう
- ・みなさんありがとう

2. 第5学年の実践

- (1) 単元名 「立ち上がる山田の漁業」 30

- (2) 単元設定の理由

山田町は漁業の町であり、かきやホタテの養殖も盛んであった。本校児童も学校でかきの

はさみこみやするめ割りなどの漁業体験もしてきた。今回の津波による被害で町の養殖施設も学校の養殖施設も壊滅した。そのような状況で、地元の漁師は、いち早くかきのいかだを直し、復興に向けて努力をしている。その姿を学ぶことにより、子どもたちは、現実と向き合いながら、一歩一歩確実に進む復興を肌で感じることにより、ふるさとに誇りを持つことができるのではないかと考え、単元を設定した。

(3) 単元構成

「立ち上がる山田の漁業」30（総合27　社会3）

第1次 地域の漁業 3（社会科）

- ・知っていることを出し合おう
- ・課題を決めよう
- ・計画を立てよう

津波直後の山田湾の航空写真と半年後の航空写真を見比べて、かきのいかだの復興について気づかせてから学習に入った。

第2次 大沢の漁業を見て聞いて調べよう 12

- ・見学しよう
- ・課題を見直そう
- ・漁師さんにインタビュー
- ・中間発表会をしよう

地元の漁師の働く姿を見学したり、インタビューをしたりする体験活動を取り入れ、これまでわかったことをまとめた。

第3次 漁業の未来を考えよう 15 3学期単元

- ・もっと知りたい分かりたい
- ・伝えよう漁業の未来
- ・学習を振り返ろう

自分達が調べてきたことをまとめ、4年生に伝えることにより、地域の実情と未来への希望を持たせたい。



3. 成果と課題

(1) 成果

- ・被災した地域を見直し、残っているもの、残したいもの、なくなったものをなくしてはいけないものについて改めて考えたり、ほかの地域をみることで山田町のよさについて再発見したりすることができた。
(「山田町も山があるのに今まで海に頼りすぎた。」児童の感想)
- ・身近にあるのに知らなかつたことや浅い知識しかなかつたことを考えるようになった。
- ・自分たちの手や足で、何とか立ち上がりようと努力する身近な人と接することで、勇気や元気をもらったり、自分達も何かしようと考えたりするきっかけになった。
- ・地域の方と言葉を交わすことで、より深いつながりが生まれた。
- ・キャリア教育の一環として、仕事を見つけ、作り上げていく過程を身近に感じることで職業とは何かを感じることができた。
- ・地域の方と接する中で子どもたちだけでなく、教師自身も地域を改めて見直し、地域に対する思いが深まった。

(2) 課題

- ・今年度から総合・生活科を重点研究してきたが、被災後の地域マップや人材バンク、単元計画などまだまだ整備途中である。
- ・地域の状況が日々変化しているため、単元を固定化することはできない。3～4年計画で、流動的な単元計画を立てていく必要がある。

総合 全学年	関連	絆⑨共感・支え合い 被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる
【題材】 震災学習		
【ねらい】		
<ul style="list-style-type: none"> 被災者の痛みを理解しようとする心をもち、人として何ができるか、これからどのように生きていくのかを一人ひとりが考えるきっかけとする。 		
【本実践と復興教育】		
総合的な学習の時間に、被災地（大槌町）出身の教諭が講師となり、津波による被害の状況や被災地、避難者の様子について映像を交えて説明し、この震災から復興するために何ができるかを考えさせる。		
【資料】		
<ul style="list-style-type: none"> 被災状況写真・映像 読み物資料（選抜高校野球 選手宣誓の言葉・オシム監督メッセージ） 		
【日時】		
4月13日（水）5校時 全校生徒対象		
【授業の展開】		
<本時の目標>		
人間として、同じ日本、岩手に住むものとして、被災された方々の痛みを少しでも理解しようとする心をもち、人として何ができるのか、これから生きるものとしてどう生きていくのか、といったことについて一人ひとりが考えるきっかけとなる時間にする。		
過程	学習活動	
導入	<p>(1)はじめに</p> <p>春の選抜甲子園、創志学園野球部主将 野山慎之介君（岡山県代表）の選手宣誓</p> <ul style="list-style-type: none"> 尊い命が奪われ、悲しみでいっぱい 仲間に支えられることで困難を乗り越えられる 生かされている命に感謝 <p style="text-align: right;">※VTR</p>	
展開	<p>(2)わたしの故郷、大槌町</p> <p>地震・津波で全てを失う</p> <p style="text-align: right;">※津波による被災地図</p> <p>(3)被災地、避難者の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ①家族を失う <ul style="list-style-type: none"> たった一人になって 家族を守って 夫婦愛 子を思う親 ②光と影 <ul style="list-style-type: none"> 支援 犯罪 ③その他 <ul style="list-style-type: none"> なぜ解雇？ PTSD(心的外傷後ストレス) 	
終末	<p>(4)おわりに イビチャ・オシム（元日本サッカー全日本監督）からのメッセージ</p> <ul style="list-style-type: none"> 今はただ生き続けるべきで、生きていくことこそが最も重要だ。生き続けて、働き続ける。そして、助け合う、私たちにできることといえばそれだけだ。 <p>■まとめ</p> <p>私たちにできること</p> 	

«生徒の感想»

この震災学習で私が一番悲しく思った出来事は、親を失った子供達がたくさんいるということです。両親を失った兄弟が一生懸命働く姿には、涙が出るくらい苦しくなりました。でも、この経験をした子供達は、きっと心の強い人になるんじゃないかなと思いました。また、その子供達がこの津波を自分の子どもや孫に伝えていくことが、一番の防災になるのではないかとも感じました。

3月11日の津波で自分が行ったことがあるところや住んだことのある町や市がたくさんの被害を受けていました。変わり果てたまちを見て言葉も出ませんでした。だけど、数々の津波を歴史の中で経験してきた日本は何十年かけてでも、きっと復興できるはずです。募金や節電など自分ができることをし、いつか日本が復興することを信じています。

■中学3年生

=震災学習後の活動①=

生徒会活動 全学年	関連	絆⑪ボランティア 人と社会のために役立つことを自分から進んで実践し、人の喜びとして共感できる態度を養う。
【活動】 【支援校】		<p>生徒会ボランティア委員会が中心となって行った、募金活動・支援物資の拠出協力 釜石中学校</p>

【生徒からのメッセージ（生徒・保護者の代表として）】

このたびの大きな震災とそれに伴う大津波により釜石方面をはじめとした多くの沿岸地域では甚大な被害を受けたと聞いております。今も自分たちと同じ中学生が苦しい環境におかれていると思うと胸が痛みます。そこで、私たち花巻北中学校では全校を上げて皆さん的生活に少しでも役立てていただけるような物資を集めました。学用品や日常品を中心に多くの物資を送らせていただきました。私たちは内陸部に住んでいるので今回の被害の全てを理解していないかもしれません。ただ同じ日本人として、同じ岩手人として、同じ中学生として何かできないかと考えての行動です。これからも私たちに何ができるかを考えていきたいと思います。

■花巻北中生徒会長

【学校長からの報告（学校便り「北天」をとおして）4.26】

- ・釜石中学校には、学校を失った釜石東中が2階のフロアを借りての新学期スタート
- ・校舎の様子－避難場所、仮設の診療室、ボランティアの人々
- ・仮設住宅の建設
- ・自衛隊による炊き出し
- ・他県の警察官による交通整理
- ・瓦礫の山、自然の力の破壊力



被災した人、生徒や学校は現在その時々の生活が精一杯で、これから先何が必要かまで考えが及んでいないのではないかと思われます。中庭に包装された自転車が5、6台、昇降口に衣類が入ったダンボール箱が多数おかれているのを見て、必要なときに必要なものをタイムリーに支援する難しさを感じました。そんな中で、支援金をお渡しできたのは良かったのではないかと思います。

=震災学習後の活動②=

特別活動	関連	技㉙地域で 防災マップを作り、地域の避難場所や危険箇所を確認し、地域の防災活動に積極的に参加できるようにする
-------------	----	---

【題 材】 総合防災訓練**【対 象】** 第1学年143名と松園4区住民約100名 合計約250名**【災害想定】** 平成23年6月8日(水) 12時50分

マグニチュード8.0の宮城県沖地震発生が発生し、花巻は震度6強の揺れを観測した。松園地区に家屋倒壊など多発し、自主防災組織により、避難誘導、搬送、消火、救命などの応急活動を行う。

【訓練の流れ】

12:00	合同対策本部の設置	実行委員会 防犯協会青パト
12:20	訓練概要説明	
12:30	事前の巡回広報	北中1年生 松園4区住民
	防災訓練開始集会	誘導防災委員会
12:50	誘導避難訓練	民生児童委員 福祉サポート員
		除雪対策防災委員会 中央消防署 花北中学校
13:35	地震・煙体験訓練	消防防災委員会 中央消防署 花北中学校
	消火訓練	給食水防災委員会 中央消防署 花北中学校
	炊き出し訓練	誘導防災委員会 中央消防署 花北中学校
	運搬訓練	救助防災委員会 中央消防署 花北中学校
	応急救護訓練	
15:35	防災訓練終了集会	

【生徒の感想】

- ・地震、煙体験は、実際に火事や地震に遭ったときに役立つと思った。地域の人とは、最初話できませんでしたが、後半になっていろいろな話ができる良かった。
- ・地震があったときのことを思い出した。ハイゼックス米やアルファ米を作るときに、地域の人からいろいろと教えて良かった。
- ・普段やらない訓練ができる集中できた。地域の人と一緒に訓練できたので、今後こういう事があったときには生きたいし、対応できるのではないかと思った。
- ・煙体験では、煙を吸いすぎて大変だった。煙は吸わないようにすることが大切だと感じた。体験中に地域の人といろいろと話ができた。

【開会式】**【搬送訓練】****【炊き出し訓練】**

=震災学習後の活動③=

学校間交流 部活動	関連	絆⑤友情 心を開いて話のできる友達、助け合いや励まし合いのできる友達づくり、友情を大切にする態度を養う
--------------	----	--

【部活動交流状況】

- | | | |
|-------|-------------------|------------------|
| ■野球部 | 大槌中との交流試合 | 父母会が昼食を作り一緒に食べた。 |
| ■バレー部 | 釜石東中他2校と交流試合 | 父母会が昼食を作り一緒に食べた。 |
| | 大船渡中、赤崎中へネット2つ贈る。 | |
| ■卓球部 | 宮古一中他2校と交流試合 | 父母会が昼食を作り一緒に食べた。 |

【交流校から】

大槌中 小野永喜校長先生

「…去る4月25日には入学式を行うことができました。入学式では制服が揃わず例年と少々違う様子もありましたが、目をきらきら輝かせ希望に満ちた104名の新入生を迎えることができ一安心といったところです。

…1、2年生は吉里吉里中、3年生が大槌高校へ間借りしての分散授業や慣れないスクールバスでの登下校、そして、部活動も限られた施設や活動時間など暫くは不便を強いられることがあります、皆様のお気持ちに応えるべく一日も早い復旧・復興に向けて努力していくたいと思います。

これまで経験のない災害に遭遇し不安と様々なものが不足している時に、いち早く暖かい手を差し伸べてくださいましたことは本当にありがとうございました衷心より感謝申し上げます。…」

大槌中 野球部員

花巻北中学校野球部様・保護者様

「このたびは、僕たち大槌中野球部と試合をしていただきありがとうございました。その他にも、カレーライスなどを用意してくださり本当に感謝しています。僕は中学校に入って楽しみにしていた野球を広いグランドで出来なくなり、落ち込んでいました。花巻北中の広いグランドで試合をすることができて、うれしかったです。…」

「…試合が終った後、記念撮影もして忘れられない思い出となりました。それに野球道具もください、ありがとうございました。…県中総体に出場してまた戦いましょう。」

陸前高田第一中 バレー部

花巻北中学校のみなさんへ

先日は私たちのために多くの支援をしていただき、本当にありがとうございました。

震災時は練習する時間も場所もなく大変でしたが、花巻北中学校のみなさんに呼んでいたおかけでたくさんのチームと交流できました。

その成果もあり、地区中総体では目標にしていた県大会出場を果たし、また、県大会当目も皆で全力を尽くして、自分たちが練習してきたことをやりきることができました。

これからも皆さんへの感謝の気持ちを忘れずに、部活も勉強も頑張っていきます。これからもぜひ交流していただけたら嬉しく思います。

これまで本当にありがとうございました。



=震災学習後の活動④=

学校間交流 交流会	関連	紲⑨共感・支え合い 被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合 いながら生きていこうとする態度を育てる
--------------	----	--

【題 材】 交流会（釜石中宿泊研修内容の一部として）

【対 象】 花巻北中1年生143名 釜石中1年生150名

【交流会の内容と流れ】 10月6日（木）

- 14:00 ①開会の言葉
- ②花巻北中校長 校長挨拶
- 14:10 ③釜石中学校からの報告
 - ・感謝の言葉
 - ・震災当時の様子
 - ・震災半年間の様子
 - ・現在の様子
- 14:30 ④花巻北中学校から
 - ・震災当時の内陸の状況
 - ・震災後の取組
 - ・現在の様子
- 14:40 ⑤校歌紹介・エール交換
- 15:00 ⑥メッセージボード贈呈（釜石中）
- ⑦合唱（花巻北中）
- ⑧釜石中学校 校長挨拶
- 15:20 ⑨閉会の言葉



【被災後の様子をビデオで紹介する釜中生】



【懐かしい
友達との再会】



【釜石中・花北中1年生 300人勢揃い】

【生徒の感想】

- ・私は、小さい頃釜石に住んでいたので、幼稚園の時の友達も何人かいいました。釜中の生徒を見ていると震災で大変なのに明るく元気に頑張っていてすごいなと思いました。釜石の方は、まだまだ大変だと思うので、少しでも協力できるように私も頑張っていきたいです。
- ・私は、合唱でみんなが一つになれたんじゃないかなと思いました。
- ・3月に被災したとは思えないくらい元気な姿でうれしい気持ちになりました。これからも頑張ってほしいです。

【2011年度防災教育チャレンジプラン 中間報告書】から

プランタイトル	EAST-レスキュー～助けられる人から助ける人へ～		
対象	全校生徒・職員・地域	担当者	副校長 村上洋子
これまでの実施内容	1 3月11日（金）東日本大震災で3階建て校舎をすべて津波で流失。 翌12日から、甲子中学校を避難所として生活。 4月25日（月）始業式・入学式。釜石中学校を間借りして学校生活スタート。 2 元気になり隊（助けられる人） ・兵庫県立舞子高校からの支援・交流・昭和音楽大学合唱指揮・漫画家さんの授業・サポート21楽器提供・光浦さん一青窈さんミニコンサート ・アルソックさん演奏会・そのほかにも様々な支援をいただきました。 3 元気を届ける隊 ・避難所（甲子中学校）でのボランティア。避難所名簿の作成、足湯隊・肩揉み隊など活動 5月 感謝の横断幕つくり		
今後計画している内容	4 今後 ①ミッション9（10月5・6日）2学年 たくさんのご支援・応援をありがとう！私たちは負けま宣言 ②防災（復興）ボランティーストの実施（10月13日） ・全校生徒を10コースに分け、被災体験を今後に生かす防災学習にする。 ③命の桜を画く（10月25日）アトリエ太陽の子の協力で開催 ・1年生55名が桜を画く。文化祭（11月3日）に展示予定 ④文化祭（11月3日） ・保護者や地域の人たちに元気を届ける。感謝の心を込めて合唱する。 ⑤かまいし第九を歌う会 参加（12月1日） ・釜石市の皆さんと一緒に元気を全国に届ける。		

<平成22年度 防災ボランティースト → 平成23年度 防災（復興）ボランティースト>

	22 テーマ	22 活動内容	23 テーマ	23 活動内容
1	防災マップ つくり	グループに分かれ、地域の方々と学校周辺を歩きながら危険箇所・避難場所の確認を行い、防災マップをつくる	救急搬送	担架がない時の救急搬送の方法を学び実技演習を行う。
2	救急搬送	担架がない時の救急搬送の方法を学び実技演習を行う。	応急処置	三角巾を用いて救急処置の方法を学び、実技演習を行う。
3	応急処置	具体的な救急処置の方法を学び、実技演習を行う。	海難救助	海難救助や水難事故を防ぐ方法を学ぶ。
4	水上救助	水上の救助方法を学び、プールで実技演習を行う。	無線	災害時停電したときの通信手段として無線を体験する。
5	炊き出し	災害時の炊き出しの方法を学び、実技演習を行う。	片岸花壇 整備	片岸の花壇にチューリップを植え、復興の一助とする。
6	防災訓練	初期消火、バケツリレーなど防火方法を学び、実技演習を行う。また、消防団の方の防災訓練を見せてもらい、消防団の仕事や役割について学ぶ。	仮設住宅 訪問 (血圧測定)	仮設住宅入居者を訪問し、健康チェックし、健康に留意するよう呼びかける。
7	両石地区フ ィールドワー ーク	両石地区の津波記念碑や史跡のフィールドワークを行う。また、両石地区で取り組んでいる自主防災について学ぶ。	ございしょの 里・山崎ディイ ケア訪問	お世話になった施設を訪問、合唱を披露し、元気のおすそわけをする。
8	片岸地区フ ォールドワー ーク	片岸地区の津波記念碑や史跡のフィールドワークを行う。また、津波記念碑周辺の刈り払いや竹ざおでの担架づくりなどのボランティア活動や体験学習を行う。	感謝の気持 ちを表す	さまざまな支援をいただいた方々に感謝の色紙を書く
9	風水害	「みんなの防災」の冊子を活用し、風水害についての防災を学ぶ。	復興キャリ ア体験	復興に向けて働く大人と共に働く。
10	海難救助	海難救助や水難事故を防ぐ方法を学ぶ。	夢を語る	鵜住居小と釜石東中の将来や町の将来について語り合う。

【軽米中学校「復興教育」について】より抜粋

1 「復興教育」の視点

震災津波と向き合い、自らの在り方、生き方を考えさせること、郷土の復興に力を注ぐ人々から生き方、考え方を学ばせること等、復興を目指す人や社会とのかかわりをとおして生き方を考えることができるよう、これまでの指導内容に今回の震災津波に関連した内容を加味する。

■本年度「復興教育」の視点を取り入れて計画した内容

学年	学年テーマとねらい(一部)	主な学習内容	
		平成22年度	平成23年度
第1学年	「自分自身を見つめる」 ・郷土に目を向け、自分と自然や地域とのかかわりを見つめ、生き方を考えさせる ・学び方の基盤づくり	○ハートフル1日体験学習 町内の特産物、伝統芸能、産業、歴史などについての調査、体験活動（ジョブシャドウ）を行い、まとめ・発表する	○ハートフル1日体験学習 10・28豪雨災害（平成11年）の被害状況、人々の対応や復興の様子を調査し、郷土の発展のために力を發揮できる基盤づくりを行う
第2学年	「他者から学ぶ」 ・地域に働く人々等とのかかわりから、他者の多様な生き方、考え方を学び、自分の在り方生き方を考えさせる	○職場体験学習 町内で5日間の職場体験学習を行う ○宿泊研修（盛岡市） 職場体験の成果と課題をふまえ、職場体験を再度行う	○職場体験学習 ○宿泊研修（野田村） ボランティア活動をとおして被災地の現状やニーズを知り、自分達にできることは何かを考えていく
第3学年	「生き方を考える」 ・これまでの学びをいかし、振り返りながら、将来の自己の生き方を深く見つめさせながら追究させる	○企業訪問（修学旅行） 企業訪問を行い、様々な企業、生き方等に触れる ○おかげさま活動 郷土のために自分ができる奉仕活動を考え、実践する	○先輩に学ぶ（修学旅行） 在京の先輩の生き方、考え方、郷土への想いに触れる ○おかげさま活動 郷土、被災地のためにできることを考え、実践する

総合的な学習の時間の主な学習内容（平成22年度、平成23年度）

2 復興教育の視点で取り組んだ各学年の実践 【復興教育＝キャリア教育で目指す姿】

- 震災津波と向き合い、人としての在り方、自らの生き方を考える
- 郷土の復興に力を注ぐ人々から、生きる力とは何か、働くとはどういうことかを学ぶ
- 復興・発展を目指す社会の中で、自らの役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくにはどうすればよいかを考え、実践しようとする。

■第1学年 「天川中募金活動」

軽米町は、かつて大規模な水害や森林火災などから復興を遂げた歴史がある。1学年では、その復興の過程や町のために尽くした人々の努力の営みについて総合的な学習の時間で学習した。

西日本を襲った台風12号の被害状況と、過去の軽米町の水害を重ね合わせ、また、全国から寄せられた被災地への支援に対して、自分たちが果たすべき役割を考えた活動である。

この活動をとおして、生徒

▼1学年生徒会報より（2011.9.13提案）

は他者や取り巻く社会と自分とのかかわりをとらえながら、自らの在り方、生き方を考えることができたと考える。



みなさん、西日本を襲った台風十二号のことは、テレビや新聞で目にしていると思います。1学年は、総合の学習で、『軽米町の過去の水害』について、取材をしました。そして、水害の恐ろしさ、命の尊さを知りました。

そこで、私たち1学年生徒会では、この台風の被害を受けた、奈良県 天川村立天川中学校に募金をしたいと思っています。何故、天川中かというと、天川中は東日本大震災の際に被害を受けた、東北の中学校にお金の寄付と、部活の道具を寄付してくれたそうです。

軽米町の水害の際の豪雨は10月27日20時～10月28日16時で230mmでしたが、天川を襲った台風は8月30日18時～9月4日24時までで1040mmでした。そして、1時間で軽米町は30.5mmで、天川は1時間で40mmでした。そして、天川中は2階の床まで浸水したそ

です。軽米町よりも相当な被害を受けています。

水害にあった軽米町も、今は通常の生活を送ることができます。

なので、下の2つのお礼の意味を込め募金活動を行いたいと思います。

- 軽米町が水害の被害を受けた時に、寄付をして頂いた全国の方へのお礼
- 東日本大震災の際に、東北にむけて寄付をしてくださった天川中のみなさんにもむけてのお礼

この2つの意味を込めて、額に関係なく、みなさんの気持ちを天川中学校に届けて欲しいと思います。

みなさんのご協力をよろしくお願ひします。
(生徒原文のまま)

■第2学年 「野田村復興支援プロジェクト」

3月下旬から4月初めにかけて、本校では支援物資を集め、大槌中学校へ送る活動を行った。その中で生徒たちは被災地の状況に思いを寄せ、その痛みを分かち合い、自分に出来ることは何かを問い合わせ、少しでも被災地のために役立とうとする姿を見せた。こうした意識を一時的なものに終わらせず、今後も広げ、育てていくことが大切であると考えた。そこで、第2学年では宿泊研修を従来行ってきた盛岡市から野田村に変更し、ボランティア活動を実施することとした。

▼2学年生徒会が設定したスローガン

野田村復興プロジェクトの目標

『糸半～49人の笑顔で、野田村を元気に』

<設定理由>

- ・2学年の一人ひとりの力を結集し、災害によって困難な生活を送っている野田村の人たちに、元気を与えるから。
 - ・職場体験で身につけた力、課題となった力を意識して、主体的に考え、行動していきたい。そして、人と人との結びつきや社会とのつながりを大切にした活動にしたいから。
- (生徒原文のまま)



生徒の感想（一部）

- ・がれき撤去など思ってた以上に大変な作業でした。人が住んでいたと思われる物などがたくさんちらばっていてとてもひさんでした。この活動を通して、私たちの身近でこんなにも大変な状況になっていることを知りました。私たちも今できることを精一杯がんばりたいです。
 - ・野田村は災害にあったと聞いていたけれど、予想よりもひどくて驚きました。僕たち中学生は限られた時間の中ゴミ拾いや草の片付けなど一生懸命やりました。僕たちの活動は終わったけど、野田村や他に災害があった所もがんばって復興を続けていってほしいです。
 - ・2日間、復興支援活動をやって、やってみないと分からぬことがたくさんありました。野田村は被害が少ないと言われていたが、ガラスの破片や生活用品が津波で流されていました、沿岸の方では、ゴミの山があり、とても驚きました。そして、必要である能力・課題である能力を作業をやっていて気がつきました。今回の課題となった「主体的行動力」は七月の職場体験の時と課題が同じで、活動場所が違ってもつながりがあるんだと思った。
- (生徒原文のまま)



■ 第3学年の実践「おかげさま活動」

本年度4月に予定していた東京への修学旅行は、震災の影響で9月に延期することになった。予定していた自主研修での企業訪問を変更し、大震災の復興に向けて今、何ができるのかを考えさせることとした。

▼「おかげさま活動」ポスターより

私達は、岩手の軽米から修学旅行に来ています。
今日は、浅草寺のこの場所をお借りして、全国のみなさんに、お礼をしにきています。
私達が、学校で毎年育てているチューリップの球根を岩手の復興の絆として、プレゼントしています。
これからも、岩手をよろしくお願いします。



▼後日送っていただいた手紙より（一部）

今春 未曾有の大被害を受けられました各地の皆々様に心からお見舞いを申しあげます。
9月2日農協日帰り旅行に参加いたし、浅草寺に詣でました折、御校の生徒さん方が育てられましたチューリップを配られておりました。“花が咲きますように”との○○さんの名前の書かれたメッセージが同封されており、いろいろご苦労されたことと思い、暖かいお心にお礼申しあげます。
(中略) 私も太平洋戦争を体験し、卒業いたしました当時の国民学校や、在学中でした女学校も全焼し、怖い思いもしましたが、今こうして元気でいるのも、多くの方々の犠牲とその後の皆様の努力で立ち直り、現在があるのだと常に感謝しております。(中略) 頂戴いたしました球根は、来春には可愛らしい花が咲くでしょう。その折を楽しみに、又咲きました時は先生方はじめ生徒さん方の姿を思いチューリップを見たいと存じます。
(中略) 私共も微力ですが今後とも応援させていただきたいと思っております。”頑張れ日本”を合言葉に一日も早い復興を祈っております。(後略)



道徳 第2学年	関連	社会⑯救援活動で働く人々 救援活動で働く人々の様子について調べ、人々の生命や財産を守るために働いている人々の思いや組織的な取組について理解できるようにする。
【教材】 「われ、ここに生きる」		
【ねらい】		
・働くことの意義を自覚し、進んで世のため人のために尽くし、公共の福祉に貢献しようとする心情を育てる。(勤労、社会への奉仕、公共の福祉)		
【復興教育の視点】		
総合的な学習の時間に、「野田村復興支援活動」を計画している。本実践では、その活動も視野に入れ、総合的な学習の時間との関連を図ったものである。資料から考えたことをもとに、自分が社会のためにできること、野田村での復興支援活動の在り方を考えさせ、勤労や社会への奉仕について考えさせる。		
【指導計画】(第2单元 野田村復興支援活動)		
第3時／18時		
【授業の展開】		
<本時の目標>		
【かかわる力】：働くということは、自分たちのためであると同時に、社会とのつながり、社会に貢献する面があることに気付き、人のために貢献しようとする気持ちを育てる		
過程	学習活動	指導上の留意点
導入	1 病気やけがをしたときのことについて話し合う。	○座席の配置をコの字型にし、意見を交流しやすい環境にする。
展開	2 「われ、ここに生きる」を読んで話し合う。 ①資料を読んで、感動したところはどこか。 ②道下医師は、霧多布で診療しながら、どのようなことを考えてるのだろうか。 ③道下医師が、霧多布にとどまって診療を続けようとしたのは、どのような気持ちからか。	○時間の経過を追って、主人公の心情を考えさせる。 ○医学部の研修生が一人で、辺境の地で人の命を任せることは大変なことであることを理解させる。 ☆自分の最善を尽くして、人のために働くことの大切さを理解できたか。 ◎人の話を聞きながら、設問に対する自分の考えをまとめ、発表することができたか。
終末	3 社会や他の人のためにできることを話し合う。 ①今、わたしたちが社会のためにできることにどんなことがあるのか。 ②そのためには必要な心構えはなにか。	☆◎身近にできる奉仕活動について、その意義を理解して、具体的に考えることができたか。

《授業の実際》

■資料について

範読後、発表させながらあらすじを確認した。

■道下医師について

「道下医師が、霧多布にとどまって診療を続けようとしたのは、どのような気持ちからか。」を発問の中心に据えて生徒に発表させた。

▼生徒の考えたことについて

一道下医師が、霧多布にとどまって診療を続けようとした検診したのは、どのような気持ちからだと思いますか。ー

- ・村の人々が自分を頼りにして、個々に残ってほしいといわれたから。
- ・自分に残ってほしいという霧多布の村の人々の熱望を感じたから。
- ・自分を頼りにしている村の人々を見捨てるわけにはいかないから。
- ・自分たち以上に困っている人たちが大勢いるのが分かったから。
- ・頼りにされているのを感じたから。
- ・自分を必要としている人がたくさんいるのに、今ここで札幌に帰ってしまっては、一生悔いがこるから。
- ・自分を必要としている人がいるのだと感じたから。
- ・人間として村人を見捨てるわけにはいかないと思ったから。

■まとめ

自分たちの生活を振り返らせ、社会のためにできること、人のためにできることについて考えさせた。総合的な学習の時間に考えたことと関連づけて自分の考えをまとめようとする生徒が多くいた。総合的な学習の時間以外のことで、委員会活動や家庭・地域での活動を取り上げ、考えを深めさせた。

▼ワークシートの記述（一部）

今、わたしたちが社会のためにできることに、どんなことがあると思いますか。（①） そのために必要な心構えは何でしょうか。（②）

①被災地への支援

社会のために働く

苦しくてもだれかのためにがんばる

②社会の様子をしっかり知る

人を思いやる

みんなのためだと思う気持ち

助け合い

がんばろうという気持ち

《実践を終えて》

- ・生活安全委員会のあいさつ運動など、各委員会では自分たちのよりよい生活のための活動を行っている。また、総合的な学習の時間とのかかわり、被災地復興支援活動として、どのようなことを自分たちができるかを考えている。資料を読んで考えたことが、自分たちの学校生活、それらの活動と結び付き、今後の実践に生かせるようにしていきたい。

特別活動 第3学年	関連	絆⑩ボランティア 人と社会のために役立つことを自分から進んで実践し、人の喜びとして共感できる態度を養う
【単元】 ボランティア活動、わたしはこう考える		
【ねらい】		
<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動の意義や活動内容について理解する ・ボランティア精神の養成をはかり、自発的な参加への意欲を高める 		
【復興教育の視点】		
<p>本実践では、地元（軽米）で起こった水害、岩手県で被害のあった大震災の時に様々なボランティア活動・救済活動を行った講師の話を聞き、生徒は自分たちにできることは何かしらあるということに気づいた。本時からは「今、自分たちにできること」を班ごとに考え、自分が、自分たちが「できること」を具体的にして活動できるようにさせたい。そのために本実践では自分に何ができるかについてテーマをもって考えようとし、目的意識を明確に持って取り組ませる。</p>		
【指導計画】		
第5時（本時）／30時		
【授業の展開】		
<本時の目標>		
<p>【みとおす力】：自分たちが考えた取組を学級での活動にするためにどうすればいいかを考えることができる。</p> <p>【みつめる力】：班のテーマから自分にできることを考え、取組を考えることができる。</p>		
過程	学習活動	指導上の留意点 配慮事項（○） 評価（☆） キャリア教育の視点（◎）
導入	1 前時までの2人の講師の話を想起させ、生徒の感想を発表させる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">震災を受けて今、自分たちにできることを考えよう</div>	○講師から学んだことを発表し合う。
展開	2 今の自分たちができることについて班のテーマを考える。 3 班のテーマから話し合いながら個人テーマを考える。 4 班テーマと個人テーマを発表する。 5 交流する。	○自分からいろいろなできることを考えさせる。 ☆○自分たちにできることを班で出し合いながら考えることができる。 ☆○自分たちが考えた取組の中で学級として取組めることができることを話し合える。
終末	6 次時への確認	○自分のテーマに沿った調査学習を行っていくことを確認する。

《授業の実際》

■講話について

一人目は、軽米の水害があったときに消防団として救済活動を行った方から話を聞いた。その中で災害に遭ったときに生きるということがどういう事かを話していただいた。また、非常にどのような行動を取るといいか、どのような助けが必要かを話していただいた。

二人目は、大震災を受けて自分の職業を復興活動に生かせないかと考え、行動を起こした床屋の方から話を聞いた。自分が本当にやっていいことなのか、他にもできることはないのかなど、ちょっとしたことでも復興支援なることを話していただいた。

「自分が一生懸命に活動すること自体が復興支援になる」という言葉が生徒は印象に残っており、自分のこれから活動に思いをもって取り組もうとしている。

—講話についての生徒の感想—

- ・優しい言葉かけが心を軽くしてくれることが分かった。(でも「がんばって」とは言えないことも勉強になった。)
- ・ちょっとしたことでも人の役に立つことが分かったから、これからは自分にできることは何なのかを考えて生活したい。
- ・今の生活というのはありがたい状況だ。
- ・誰かのために活動したいと思った。
- ・自分のことを一生懸命頑張ろうと思った。

■生徒の考えたことについて

それぞれ、班テーマを「ボランティア」「節電」「水（自然災害）」「海外からの援助」「お金」とし、個人テーマを学級で共有したところ、様々な分野と絡んでいることが分かり、どこかで何かとつながっていることを認識できた。

一生徒の班テーマと個人テーマの一部

ボランティア	節電	水	海外からの支援	お金
・自分たちでできるボランティア	・自分でできる節電方法	・防災	・ボランティアの人数	・募金がどのように渡されるか
・ボランティアの人数	・これからエネルギー	・水害	・海外からの義援金	・義援金の金額
・義援金	・万が一への準備	・津波		

■まとめ

5つのテーマの中から学級として取り組めることはないかを考えた。また、これをもとにして修学旅行やおかげさま活動にいかしていくということにつなげた。

《実戦を終えて》

- ・班活動の中で自分たちにできることは多くあることを知ることができた。様々な視点の中でできることを考えた結果、自分たちにできることを深めたり、今の自分にできることを選択することができた。
- ・自分たちに実現がどうすれ可能かどうかを考えさせることで、もっと身近にボランティアを感じることができ、話し合いもさらに活発にできたのではないか。

特活・総合 訪問学習	関連	絆⑨共感・支え合い 被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる
---------------	----	--

-大東中学校の基本的な考え方-

- 被災地に行き、現実を知るところから生徒たちに感じ取らせる。
 - ・百聞は一見に如かず。映像の世界と現実の世界は全く違う。
- 共に生き、共に地域を作る人々の絆と復興を常に念頭において生きていく。
 - ・被災した人々や地域を肌で感じながら、自分にできることを模索し行動し続ける。
- 地域の未来に向けて自分たちの思いを発信することによって、思考力や表現力を磨く。
 - ・ことばの力を再認識する。

見て、聴いて、感じる被災地訪問学習

【位置付け】

将来の復興の担い手となる生徒たちに、様々な事を感じ、今後の生き方を考えてもらうため、学年ごとに、全校生徒が被災地を訪れて、被災された方々から直接お話を伺い、復興に向けたこれまでの活動や将来の生き方を考える上で大きな示唆を得る学習

【きっかけ】

気仙中学校生徒会「復興宣言」

筆舌に尽くしがたい体験をした同年代の仲間たちが、つらい現実から立ち上がり、未来を見つめ前進しようとしている。内陸に住む私たちもまず現実を知るところからはじめるべきではないのか。

気中復興宣言

2011年3月11日、私たちは陸前高田市気仙町で、生活していて、地震とその後の津波により、自分達の学校や家など多くのものを失いました。

震災の直後は、繰り返しやってくる余震の恐怖と、連絡が取れない家族や友人に早く会うことだけを考えながら生活していました。そんな震災直後の生活中でも、全国の皆さんからの多くの支援や応援があつたおかげで私たちは一日一日を生きていくことに希望を持つことができました。また、借りている校舎での学校生活が始まり、前より不自由なことはあっても、勉強や部活に取り組むことができています。

支援や声援をくださった皆さんには、感謝の気持ちでいっぱいです。

ありがとうございます。校内のアンケートでは、特にうれしかったものとして「制服」「文房具」「部活の道具」等が多くたのですが、「全国や世界の皆さんからのメッセージ」「頑張ってという言葉」「どんなものでもいただける」ということが一番うれしい」というものがありました。

同じくアンケートでは、感謝の気持ちを表すために「手紙やメッセージを送りたい」というものが多く、他に「明るいあいさつをする」「自分たちが笑顔で生活することで感謝したい」というものもありました。一人一人が感謝の気持ちをもち、その気持ちを伝えたいと考えながら生活しています。

私たちの生徒会は、今年度の前期スローガンとサブスローガンを、

Never Give up ~力強く歩いていこう~と生徒大会で決め、行事や生徒会活動に取り組んでいきます。校舎が変わり、気仙中の形あるものはすべて失われました。しかし、私たちの応援や合唱、先輩から引き継いできた行事や取り組みなど、形のない文化は私たちの手で確実に次の代に残していくたいと思います。

先のことが分からず、不安なこともたくさんありますが、あきらめたら歩みは止まると思うので、「あきらめない」「力強く」と全員で決めて進んでいきたいと思います。

地震や津波は私たちの心に深い傷を残しましたが、全国の皆さんからの優しい気持ちを知ることと、全校がより強く一つにまとまって目標に進むことができるようになりました。

この気中復興宣言をまとめることで、支援・声援を下さった皆さんと自分たち自身に気中復興に向けて取り組むことを誓います。

2011年5月30日

気仙中生徒会

【訪問先】

1年生・3年生： 気仙中学校「震災当日の避難の様子やこれからの生き方、防災について」

2年生： 大船渡「津波の恐ろしさと津波劇について」

【実際の取組】

	第1学年	第2学年	第3学年
目的	<ul style="list-style-type: none"> ○実際に被災地を訪れ、自分の目で見て耳で聞いて肌で感じることにより、同じ時代と共に生きていく決意を新たにさせるととも、今自分にできることや将来の生き方を真剣に考えるきっかけとする。 ○被災者の方々の心情を察するとともに、あたり前の日常に感謝する気持ちや思いやりの心を育てる。 ○被災から得た教訓や考え方を地域の人たちに発信していこうとする態度を養う。 		
期日	平成23年10月3日（月）	期日：平成23年9月29日（木）	期日：平成23年10月4日（火）
訪問先	気仙中（旧矢作中） 陸前高田市内	訪問先：大船渡市内、陸前高田市内	訪問先：気仙中（旧矢作中） 陸前高田市内
内容	気仙中 越校長先生の講話	沿岸南部教育事務所 熊谷先生の講話	気仙中 越校長先生の講話
取組の計画	取組の計画	取組の計画	取組の計画
	<ul style="list-style-type: none"> ・学年集会 被災地学習の説明 ・学年集会 被災地学習事前確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・「自然災害」について学習 ・被災地学習の説明 ・演劇実行委員会（津波劇に決定） ・劇についての学年説明 ・被災地学習に関わる事前指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・被災地学習に向けての事前指導 ・演劇具体活動開始
○被災地学習実施	○被災地学習実施	○被災地学習実施	○被災地学習実施
	<ul style="list-style-type: none"> ・学習のまとめ 1 自分たちと同じところ、違うところ（ワークショップ）①② 2 「自分たちと同じところ、違うところ」と「気中復興宣言」 	<ul style="list-style-type: none"> ・札状書き ・津波劇DVD鑑賞 	<ul style="list-style-type: none"> ・行事検討委員会（演劇脚本検討） ・脚本「忘れない」、キャスト決定 ・被災地学習のまとめ 「陸前高田市を訪ねて」を気仙中宛てに発送

生徒たち一人一人の中で何かが変わり始めた。「家族を失い、学校を失い、大変な思をしているはずの気仙中の生徒たちが、復興に向けてこんなに頑張っているのに、何の不自由なく過ごしている自分たちはこのままでいいのだろうか。」一人一人には常にこんな問い合わせがあったのではないか。

演じた・歌った・感じた 希望の光を灯した萩香祭



【気仙中 越校長先生の講話】

1学年 被災地学習発表「未来へ」

2学年 津波劇「荒れ狂った海」

3学年 自作劇「忘れない」

吹奏楽発表・学級合唱

学年合唱・全校合唱

【家族・地域の方々からの声】

・震災の時と重なり涙をもらってしまいました。気仙弁もよかったです。周りの人の痛みもわかり思いやりのある人間性をくみとってやれる人になってほしいです。気仙中とは今後もお互い交流してほしいです。（家族）

・震災を正面から受け止め、自分のことにして取り組んでいました。中学生らしい真面目さが伝わってきました。ステージ発表、合唱どれをとっても立派でした。（地域の方）

・震災を一貫したテーマとして取り上げたことはこれから生き抜く子供たちにとって貴重な体験だったと思います。津波の復旧復興問題も先の長い話ですが、放射能についてはさらに厳しい時代が続くのだと考えると「光」を心の中に持ち続けることができるかどうか歩みの大きな支えになるのだと思います。今後も機会を捉えて振り返りくりかえし指導していただけたらと思います。（家族）

溢れる満足感・充実感 萩香祭 生徒たちの声

- ・今年の萩香祭では、テーマ「光～明日への希望～」を頭の中に入れて、どの活動にも全力を尽くせたと思うので、良かったと思います。特に力を入れたのは演劇です。被災地に行って熊谷先生のお話を聴いて、これは学校に行って早く練習して皆さんに伝えないといけないなと思いました。この劇は今年のテーマに合っていると思ったし、本番ではよくできたと思います。（2年生）
- ・行事の時いつも思うのは「やろうという気持ちを全員がもっていれば絶対最高のものができる」ということ。どうでもいいと思っている人が一人でもいればそれは絶対だめだと思う。今回の萩香祭は閉会セレモニーを見てもわかるようにとても成功だったと思う。よかった。泣きそうになった。（3年生）

大東中学校 キャリア教育の推進・充実

健康教育 心のケア 全学年	関連	技②③身を守る 地震津波、火災、崖崩れ、風水害などに直面したとき、自分の命を守り、被害を最小限にとどめるための技能を身につけることができるようになる。
---------------------	----	--

【題材】 こころのサポート授業2**【ねらい】**

- 児童生徒の抱える見えない「ストレス」や「トラウマ」を教職員が早期に発見し、それらによって引き起こされる生徒指導上の問題や学校不適応及び学業上の問題等の未然防止に資する。
- 中長期に渡る児童生徒のこころのサポートのための参考資料とする。

【実施概要】

- 各学級とも教員2名がつき、各学級担任がAタイプ（被災が比較的小さい地域向け）で実施。沿岸被災地から転校した生徒の学級には、担任の他、養護教諭、若しくは学年主任を配した。
- 心とからだの健康観察結果により、サポートの緊急性が高いと思われる生徒に対して、担任による個別面談を行う。その結果、さらに対応が困難と思われる生徒には、スクールカウンセラーによる面接を行う体制をとった。

【日時】

9月21日（水）1校時1学年生徒、2校時2学年生徒、3校時3学年生徒

【授業の展開（例）】

※ただし、こころの健康観察（二重線枠）部分は変更不可、その前後は実態に応じて改変可

	教師の活動	留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 健康に関する話 5項目健康観察のことを振り返る (推奨)簡単なリラクセーション 	<p>※こころの授業①を実施していない場合には、一般的な心と体の話と、肩上げのリラクセーションを実施</p> <p>※リラクセーションは深呼吸、首回しなどでもよい</p>
こころの健康観察	<ul style="list-style-type: none"> 目的を説明する 実施上の注意をする 健康観察用紙を配布する <ul style="list-style-type: none"> ○導入部分をそのまま読む ○1問ずつ読み合わせながら回答させる 	<p>※どんなトラウマ反応があるのか知る 自分の反応の程度を確認する</p> <p>※指導案の付録、健康観察用紙の導入部分、別紙「心とからだの健康観察19項目版・31項目の版実施にあたって」を参照。</p> <p>※児童生徒に反応（泣く、顔が下がる、具合が悪くなる、退席する等）が見られた場合には、つきそいの教員あるいはSCが別室に誘導しケアする。</p> <p>※健康観察の文言については改変不可、説明で意図を解説する。</p>
フィードバック	<ul style="list-style-type: none"> リーフレットの配布 <p>個別にケアの必要な児童生徒はアンケートだけでなく、日常の観察、保護者の情報も含めて判断する。得点の高い生徒は自分からサインを出しているし、被災しているのに点数が低い生徒は逆に見守りが必要</p>	<p>※リーフレット（改変可）のつくりを説明する</p>
	<ul style="list-style-type: none"> リーフレットの説明 ブロック毎の足し算 【反応の種類】と対処について説明する 	<p>※時間があれば自然な反応であるという話をする。</p> <p>※ブロック毎の合計点を出す。めやすとして、 31項目→10点／19項目→6点 1つでも最高点に○があれば要チェックである。</p>

フィードバック	<p>【びっくり・こうふん】 →リラックス等 【思い出してつらい】 →聴いてもらう等 【マヒ・さける】 →少しずつチャレンジ等 【マイナスの考えがうかぶ】 →自分を責めなくてよい →自分の夢をかなえるエネルギーに等 • 見えない反応について理解をする • どの反応に対しても対処することができるという事を伝える。</p>	<p>※1つの反応にその対処だけとは限らない。例えば、【思い出してつらい】ときに体が緊張していることも考えられるので、“聴いてもらう”以外に“リラックス”も対処として有り得る。 ※【マヒ・さける】や【マイナスの考え】は一見普通に見えるが、言えずに本人は苦しんでいるかもしれない。このような健康観察はそのことを話題とする機会でもある。</p>
終末	<p>• 今日の授業の感想を書く • 気分転換をする</p>	<p>※扱いの難しい話が出た場合には、話してくれたことに感謝し、そのことも考えていこうと伝える。 ※気分転換については、背伸び程度で。</p>

【実施後の状況】

養護教諭及び主幹教諭、教育相談担当が中心となり、「心とからだの健康観察」の記述内容により、サポートの必要性が高いと思われる生徒を選び出し、担任面接を実施した。スクールカウンセラーに繋げる必要が認められる生徒はいなかった。

また、健康観察や担任面接の結果は、学年単位で情報の共有を図り、必要に応じて全職員での情報共有を図った。

【関連する取組】

- 8月28日に、河村茂雄教授（早稲田大学）による「危機にこそ大事にしたい学級集団の力－教師だからできること－」の研修を受講。学級集団づくりや心の教育等について学び、校内研修会を開いて全職員で共有した。
- 10月下旬、教育相談週間において、全校生徒に対する個別面接を実施。サポートの必要な生徒を把握した。

【生徒の感想】

- ・イライラやストレスの解消法がわかった。
- ・アンケートを誰かにみせることで、自分をわかってもらえると、うれしい気持ちになった。
- ・プリントに書いてあった方法をちゃんとやってみようと思った。
- ・アンケートに書くことで、自分はこんなことを思っていたんだということに気づいた。
- ・今まで自分の中にため込んでいた。もう少し相談したりしてみようと思った。
- ・気持ちが安らかになった。
- ・自分の心と向き合うことができた。
- ・心の整理がついた。
- ・心に余裕が生まれた。

こうした感想が多い一方、何のためにやっているのだろうかと思った、アンケートでイライラした、といった感想も若干見られた。

また、家庭生活の悩みや自分を理解してくれる人がいない不安など、震災に関連しない内容の記載もあり、生活全体に関わる問題の発見につながったケースもあった。

生徒会活動 全学年	関連	絆⑨共感・支え合い 被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる
--------------	----	--

【大船渡市立第一中学校生徒会 ボランティア活動の記録 ーー中生メッセージDVDより】

3. 11 (金)

2011. 3. 11

それは、卒業式の前日でした。

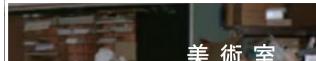
午後 2 時 46 分

私たちは、学年集会中に、東北地方太平洋沖地震にあいました。

私たちの大船渡市立第一中学校も大きな被害を受けました。

ライフラインも途絶し、周囲からの情報も入らなくなりました。

津波は学区にも流れ込み、私たちの故郷大船渡の景色を一夜にして変えてしまいました。私たちは目の前の光景にただ呆然と立ち尽くすしかありませんでした。



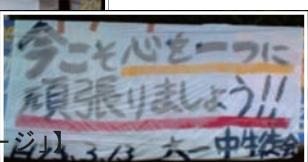
【目の前の景色】



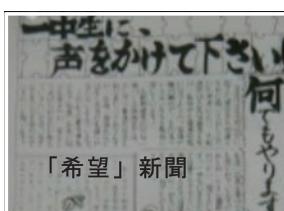
3. 13 (日)

震災から 2 日後、一中生徒会では、とにかく何かをしなければ… …、という思いから家にあったシーツに地域に向けたメッセージを書いて掲げました。

通信手段が途絶しているので学校と家庭との連絡と、ボランティアを通して地域に私たち中学生を役立ててもらおうという呼びかけを目的として有志による「希望」新聞を制作し、配布をはじめました。 ※3. 18 (金) ~



【地域に向けたメッセージ】



「希望」新聞



一中に届けられた皆さんからのご支援や励ましのメッセージは、地域のために何ができるのかを考え、悩んでいた私たちの背中を強く押してくれました。

合唱ボランティア活動4. 13(水)
復興コンサート(吹奏楽部)4. 17(日)
※リアスホール(避難所)にて

♪「栄光の架橋」「この星に生まれて」他



希望隊の活動 3. 24(木)～ ゴミ拾い、炊き出し、
支援物資の仕分け、清掃、河川敷清掃、家庭訪問

【盛小学校
清掃作業】

【盛川清掃ボランティア】



4. 7 (木)

津波で校舎が大きく損壊した釜石東中に横断幕を届ける活動にも取り組みました。



そして、例年から20日遅れて新学期がスタートしました。

生徒総会では地域の復興に向けて一中生徒会ができるることは何かを真剣に話し合いました。



運動会の直後、私たちの校庭には仮設住宅が建ち、自分たちの校庭ではしばらくクラブ活動も授業も行事もできなくなりました。



「気仙のみんなに希望の光を！」のスローガンのもと、こんな時だからこそ運動会を開催し大船渡の皆さんに元気を届けようと考えました。



このような状況下で頂いた、皆さんからの励ましのメッセージや横断幕、支援物資は私たちの心を支え、学習やクラブに向かう大きな力になっています。



ご支援、本当にありがとうございました。私たちの故郷大船渡が復興するその日まで私たちは頑張っていきます。引き続き応援をお願いします。

■直接体験から育てる「心と心のつながり」

■元気魂プロジェクト「自分たちの頑張っている姿」を……写真（ポスター）で発信

総合的な学習の時間の取り組み

1 学年テーマ
震災を乗り越えよう
1組：絆～ボランティアについて
考えを深めよう～
2組：希望発信～大船渡市・陸前高田市にもう一度観光客を呼び戻すために～
3組：今できること～エネルギー～
4組：過去から未来へ～大船渡へ夢を～

2 学年テーマ
わたしたちの町の復興とそれを支える人たち
現在わたしたちの町の復興とそれを支える人たちに焦点をあてて学習する。どのような人たちが復興に向けて努力しているのか、復旧作業にあたった人たちが、何を考えどのような思いの中で復興を目指しているのかをまとめる。

3 学年 キャリア教育の日
○高校の説明と中学生に期待すること
・ゲスト：大船渡高校・大船渡東高校
高田高校の各校長先生
○働くことの意義や大切さや、その職業につくには。中学生に期待すること。
・ゲスト：保育士、介護士、医師、教育、建築、マスコミ

平成23年度修学旅行 平成24年2月8日（水）～10日（金）（2泊3日）

第2学年131名

【目的】東日本大震災の支援・援助して下さった方々に直接お礼をするとともに、「阪神淡路大震災」から復興を体験した人たちから直接話を聞くことによって、多くのことを学ぶ。

【訪問先】

- 大阪府庁舎 ○高槻市阿武山中学校
- ・宝塚市庁舎・豊中消防音楽隊・大阪府警
- ・自衛隊大久保駐屯地・神戸新聞社
- 北淡震災記念館 ○人と防災未来センター

【訪問時の主な内容】

- プレゼン－文化祭での発表内容+総合的な学習の時間を使い、生徒が身近な方々へ復興にかける思いをインタビューしたもの
- 合唱－「イーハトーブの風」（あんべ光俊作詞）+構成詩
- その他－壁新聞を作成し、掲示

総合的学習 第1学年	関連	絆⑩ボランティア 人と社会のために役立つことを自分から進んで実践し、人の喜びとして共感できる態度を養う
「産業社会と人間」における災害復旧活動報告		
1. はじめに		
<p>3月11日に発生した東日本大震災による甚大な被害がわかるにつれ、私たちも何かできないかとの思いが強くなり、何かの形で被災地支援を行うことを考えるようになった。</p> <p>そこで、新1年次団は「産業社会と人間」のなかで災害復旧活動を計画した。「他者理解」を目標の1つに掲げていたため、被災地の現状を知ることも、他者を理解することであり、さらに、実際に活動をすることで、自分に何ができるのか、また、できることは何なのかということを知ることも大事だと考え、災害復旧活動の実施を決定したものである。以下はその報告である。</p>		
2. 取組の概要		
<p>(1) 災害復旧活動場所の選定</p> <p>復旧活動を行う場所として、4月26日（火）に、野田村に行くことに決定した。これは、一戸高校から一番近い被災地であったこともあるが、生徒を引率する関係上、安全面等で心配されることもあり、被災地の中でも比較的被害の少ないところ、1年次生110名が活動しても支障のない場所を選ぶ必要があった。選定や実現のポイントは、次の点であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野田村は、早い段階で死者・行方不明者がすべて判明し、機械によるがれきの撤去が他の地域よりも進んでいた。 ・活動中に地震や津波があった場合を考え、避難経路等を指示できる野田村出身者が引率教員の中にいた。 ・一度に110名という人数の受け入れは、実は小さな自治体にとっては大きな負担であるが、村長から「人手の足りない平日にぜひお願いしたい」という話をいただいた。 		
<p>(2) 生徒・保護者への説明</p> <p>今回の災害復旧活動は、授業の一環として行ったものであったが、保護者から不安の声が出ることが予想されたため、授業の一環であるものの強制ではないこと、どうしても行く気持ちになれない生徒は学校で別な作業をできること、本人と保護者の同意によって参加するものとした。</p> <p>保護者からは何件かの問い合わせがあったが、結果として110名全員の承諾があった。</p>		
<p>(3) 事前準備</p> <p>①ボランティア保険</p> <p>一戸町社会福祉協議会でボランティア活動保険、天災タイプAに加入。費用は1人490円（内60円を一戸町社会福祉協議会が負担）。</p> <p>②活動道具</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マスク・軍手・ゴム手袋・消毒用アルコール・ウェットティッシュは学校より持参。 ・スコップは学校より数本持参、持参できる生徒は各自持参。 ・服装は学校ジャージ、靴はできるだけ長靴。 <p>③心配されていたこと</p> <p>事前に様々な準備をしていたが、一番心配されていたことは現地に行ってからの生徒たちの精神的なショックが起こらないかどうかであった。万が一のためにスクールカウンセラーの先生にアドバイスを受け、また、当日は養護教諭にも引率してもらった。</p>		
<p>(4) 災害復旧活動の様子</p> <p>①活動内容</p> <p>1班：役場の清掃（壁の汚れ落とし、床掃除等）</p> <p>2班：民家の泥だし</p>		

- 3班：拾われた写真の洗浄
 4班：消毒用の石灰まき
 5班：民家跡のがれきの撤去
 ②活動の様子

野田村に向かうまでのバスの中はさながら遠足のような雰囲気だったが、野田村に入った瞬間目に入るのががれきの山。これを見たあたりから生徒たちの目の色が変わったようだった。

活動時間は朝10時から、お昼1時間の休憩を挟んで15時までの正味4時間。肉体的にもきつい作業が多くなったわりには、最後まで一生懸命活動していた。当日は、他のボランティア団体も作業をしており、その方たちと交流を持った生徒たちもいた。

3. 取組を終えて

(1) 生徒の感想

授業の一環として行ったため、通常の「産業社会と人間」と同様にまとめを書かせた。できるだけ気持ちを聞かないようにまとめさせるため、「災害復旧活動に参加してみて気づいたこと、考えたこと」「今回の経験をもとに、意識して生活していきたいこと」という質問項目にした。(以下、生徒の感想の一部抜粋)

僕は、石灰をまく仕事をしましたが、実際間近で見て、とてもショックを受けました。ついこの前までたくさんの人たちが幸せに暮らしていたのに、あの地震で一瞬にして何も残らなくなってしまってかわいそうでした。でも震災のショックがあつたのにもかかわらず、一生懸命片付けているところを見て、改めて人の強さを感じました。

お昼休憩や帰りのバスに乗る前に、何人かの人たちと話をしました。「どこからきたの?」「大変でしょう?」「ごくろうさま」「ありがとう」「気をつけて帰ってね」自分たちも大変なのに、私たちにお礼を言ってくれたのでうれしかったです。

活動は少しきつかったが、現地の人たちに感謝されたのでうれしかった。感謝されることがこんなにうれしいものなんだと思った。ボランティアに参加することは、人と人がつながっていくことに関わることなんだと思った。少しでも被災地の人のために、まず自分たちができる仕事をちゃんと続けなければいけないと思った。

(2) 今後の指導について

生徒たちのまとめを読むと、今回の災害復旧活動でそれが様々なことを感じ、学んだようである。今後の指導としては、この経験をすぐに何かに活かすというのではなく、これから進路選択をする中でこの経験がどこかで生きてくる指導をしていくことが大切であると考える。特に今回は「他者理解」を念頭に置いての活動であったため、他人の痛みのわかる、他人に気を遣うことのできる人間になってもらいたい。そのためには1年次での指導はもちろん、2・3年次になってからの継続的な指導が重要であり、3年間を通して効果的な指導を考えていきたい。



写真1 役場の清掃の様子



写真2 拾われた写真の清掃の様子



写真3 消毒用の石灰まきの様子



写真4 民家跡のがれきの撤去様子

事例12

第2編 – 各学校における実践事例

提供：岩手県立盛岡第三高等学校

【内陸部の高校生による震災ボランティアについて】

1. 活動の概要

本校では、今年度生徒会が中心となって震災に関わるボランティア活動を4回企画し、延べ約230名が有志として被災地に赴き活動を行った。本校の教育目標に掲げている「これから時代と社会のリーダーとなる人材」を育成するために、生徒達に現地で何かを得てほしいという気持ちが校長をはじめ教員の間でも強かったことが、年間を通してボランティアの実施につながったと考えている。

内容の概要は以下の通りである。

第1回 6月4日 宮古市津軽石川の清掃

ボランティア（約100人）

第2回 7月9日 大槌町大槌川「菜の花プロジェクト」への参加（約50人）

第3回 9月3日 大槌町大槌川「菜の花プロジェクト」（台風により中止）

第4回 11月6日 陸前高田市小友町の田んぼの瓦礫拾い。（約80人）

実施に際しては、初期は情報収集や現地とのパイプ役の存在が重要となった。震災から間もない段階では、ボランティアの斡旋を行う現地の社会福祉協議会（以下、社協）に半月以上先の大口のボランティアの斡旋をお願いすることは難しかったと思われたからである。そのため、第1回は移動に利用した宮古市に本社のあるバス会社、第2回は大槌に実家のある本校職員がプローカー役になって計画したものを社協に持ち込み、ボランティアとして認めてもらうという手法をとった。第3回以降は、交通費など費用面が問題となつた。これは国際開発救援財団（FIDR）から援助を受けることで解決し、生徒個人の負担を最小限にとどめることができた。

2. 活動の成果等

第1回の内容は津軽石川土手の瓦礫拾い。県高総体の中心会期中にも関わらず、約100



写真1 瓦礫を集める野球部員（津軽石川）

名の有志が集まつた。多くの生徒が県大会で公欠だったことを考えると非常に高い参加率であり、生徒達の震災のために行動したいという気持ちが伝わってきた。また引率教員も、沿岸に縁がある人達が集まつた。ボランティアの後には、宮古市議による現地の状況説明、バスによる被災地の見学等も実施した。



写真2 金山氏(前列左から5番目)との記念撮影（大槌川）

第2回は、大槌町に住む金山文造さんが企画した「菜の花プロジェクト」という大槌川の土手に菜の花を植える運動に協力したものである。午前は、男子は石を川に捨てる作業、女子は燃えないゴミ拾い。午後は肥料蒔きを行つた。とても暑い日だったが、生徒は意欲

●第2編－各学校における実践事例

的に作業を行った。途中、現地の震災当時の状況の説明もあり、帰りは大槌から釜石まで沿岸沿いの道路を通って被災地を見学した。

第4回は、陸前高田市の社協にボランティアの申込みをして、そこから小友町の田んぼの瓦礫拾いと、個人宅の清掃作業に派遣された。全滅した市中心部を通って現地に移動したが、あまりの被害の大きさにバスの中から声が出なくなつたのが印象的であった。



写真3 瓦礫を掘り出している様子（高田）



写真4 道の脇に瓦礫を積んでいく（高田）

第4回（陸前高田）の後に、生徒会執行部の生徒にボランティアの感想文を書いてもらった。その一部（抜粋）を紹介する。

○天災の恐ろしさを改めて痛感し、それを乗り越えようとしている被災者の強さを知ることができました。（一年女子）

○ボランティアを通して、私は誰かの為に行動することの良さを改めて気づくことができました。作業が終わった時に感じた達成感は何物にも替えられません。今回は現地での直接的な支援を行いましたが、今後は多方面からの支援も検討していきたいと考えております。（二年男子）

○帰る時におばあさんから私たちに向けてお礼の言葉をいただいた。私達は、「ありがとう」と言ってもらうことを目的にボランティアに行ってている訳ではないが、そういった「ありがとう」を言ってもらえるような活動を、この先もしていきたいと思う。（二年女子）

○私たちがしなければならないことは瓦礫の撤去のボランティアだけでなく、被災者のお話を聞くこともその一つだと思います。私たち内陸の人たちは震災のことを忘れてはいけないし、沿岸の人たちは震災当日あったことを話すことで、教訓を伝え、少しでも心の傷を軽くすることができるかもしれないからです。（二年女子）

○震災から半年以上が過ぎ、それを忘れかけてしまっている人も多いと思いますが、未だに元の生活に戻っていない人も沢山います。自分たちが普通の生活をしている中、苦しんでいる人もいるのだということをふまえてこれからを過ごしていきたいです。（二年男子）

○今後はボランティアだけではなく、復興を考えていかなければならぬと思うので、自分たちでできることを話し合い、実行していきたいと思いました。（二年女子）

「復旧」から「復興」にシフトしていく中で、我々の活動内容にも質の転換が必要となってくる。生徒会執行部でも、三高が今後どのように被災地と関わっていけるかということが課題として上げられている。

内陸の学校という立場で、震災にどう向き合い、行動すべきなのかを模索した一年であった。

【恩返しの気持ちを育てたい】

1 はじめに

本校は、宮古市田老地区にある全日制普通校で生徒数98名の小規模校である。生徒一人ひとりを尊重する教育を目標に自主的、自発的学習態度の確立を目指し、進学に就職に希望を叶える学校として地域の人材の育成を目指している。先の3月11日の東日本大震災津波においては、校舎には直接的津波被害はなかったものの生徒43名が被災認定を受けるなど、その後の教育活動への影響は大きかった。今回、内陸の学校による沿岸地区のサポート事業により、不來方高校が本校のサポート校の一つとなったことが、両校の交流事業が始まるきっかけとなった。

2 取組の概要

(1) 陸上部への支援

サポート事業の第一弾として、不來方高校陸上競技部との合同合宿が実施された。これは、盛岡地区陸上記録会に本校陸上部が招待されたもので、不來方高校セミナーハウスに宿泊しながら合同練習・記録会への参加を支援された。本校陸上部員の中には生徒会執行部員が所属しており、以下の生徒間交流へのきっかけとなった。

(2) 生徒会交流計画会議

不來方高校生徒会の提案により7月6日、本校セミナーハウスにて、震災後、両校にて何かできることはできないかという話し合いを持った。たくさんの意見が出たが、お互いの文化祭に参加することで生徒会交流をすること、セミナーハウスを宿泊に利用させていただきながら行う部活動交流を今後も続けることなどが決まった。また、不來方高校生徒会が体育祭においてジュースを販売した売り上げ金全額を本校義援金として寄附していただいた。



写真1 両校生徒会による話し合い



写真2 義援金をいただく

(3) 不來方高校文化祭参加

9月3日、不來方高校の文化祭に本校生徒会(9名)は、宮古の新鮮なサンマ150匹を持参し、さんま焼きコーナーを出店協力するという形で、不來方祭へ参加した。1日だけの交流となつたが、両校の生徒会役員が焼く係、販売する係と交代で協力し友情を深めた。

最後には、ここまで打ち解け、次回の宮古北高校文化祭での再会を約束し、終了した。



写真3 両校生徒が協力し、焼く



写真4 販売も協力して行う

(4) 宮古北高校文化祭



写真5 文化祭の売り上げをいただく



写真6 打ち解けて作業もスムーズ



写真7 食堂も手伝っていただく



写真8 展示作品もお借りする

10月1日の本校文化祭に、今度は不來方高校生徒会役員8名、空手部5名、ソフトボール部5名の協力をいただいた。恒例のさんま焼きの他、小規模校の現状を理解していただきPTA食堂の給仕なども手伝っていただいた。本校は生徒数が減っているので、文化祭全体の運営の助けとしても大変助かった。また、芸術科生徒による作品展示にもご協力いただき、宮北祭の内容をより深いものとさせていただいた。そして、前回の訪問につづいて今回も不來方高校文化祭の売り上げ金を義援金として寄附していただいた。

3 取組を終えて

震災により、毎日の通学路の風景が一変してしまった本校生徒達にとって、今回の生徒間交流によりたくさんの勇気を与えられたと思う。復興へ向けて未来を担う高校生同士だからこそ、被災地、被災地以外の生徒それぞれお互いに考えることが良い経験になったと思う。また、狭い地域だけでなく外に出てたくさんの人たちと関わる機会自体も彼らの世界を拡げ、人間的に成長させる良い経験になったと思う。この交流を一過性の物にせず、今後も続けていきたい。また、たくさんの方に励ましの言葉や支援をいただき、大変感謝している。

【『笑顔と感動が生徒の活力のもと』－主に中学部の取組から－】

1 はじめに

(1) 学校概要

平成23年3月11日現在、小学部15 中学部14 高等部23 しゃくなげ分教室20 計72名 22学級
自宅からの通学生が47名(ほとんどが釜石・大槌地区)

(2) 震災当日の状況（主に中学部）

中学部14名は全員通学生(1年2名、2年4名、3年8名) であり、発災時は6校時の授業中で校内にいた。釜石駅以西の生徒は保護者迎えにより、帰宅した。中学部生徒3名と大槌町から迎えにきた保護者1名が、高等部生徒と職員の帰宅困難な者とともに校舎内で夜を明かした。

(3) 被災状況

中学部14名中 8名が被災

…保護者死亡1 自宅流失3 自宅大規模半壊1

居住地域大規模全壊地区指定1 保護者失業3

13日以後、生徒4名、保護者3名が校内で避難生活となる。

(避難者追加 生徒2保護者2、帰宅生徒1)



【写真1】校内にて避難生活

2 取組の概要

(1) 学校再開までの課題

① 安否確認と安全で落ち着ける生活環境の確保

② 生徒・保護者の心理的安定

…心理状態に配慮した情報提供

…体調不良の保護者へ通院の促しや付添い

③ 学校としての機能回復

…3月21日 4家族の校内避難生活から別の場所へ移動

…3月29日 高等部卒業式

…3月31日 校内避難所解消→自宅へ戻れない生徒は緊急対応として施設や病院へ

…4月18日 中学部卒業式・入学式・始業式 学校再開

(2) 被災による影響

① 不便な生活

地域によっては5月上旬まで電気・ガス・水道などのライフラインの不通が続いた。物資の不足、買い物制限、支援物資に頼る生活は食事や日常生活に多大な影響を与えた。

② 体調の変化

職場の流失により失業した保護者もあり、生徒の生活環境は厳しくなった。十分に食べていない、いつもと違う食生活のため、体調不良や体重減となった生徒もいた。

③ 心理的な不安

避難生活によるストレスから、不機嫌な独り言や元気のない様子が見られた。特に家族から離れての入院生活となつた生徒は下を向いたまま元気がない様子であり、できるだけ職員が付き添うようにして心のケアに当たつた。

保護者も同じく元気がない様子が見られ、経済的な不安、喪失感、先行き不安な状態、体調不良やむくみ、夜眠れない、疲れがとれない、イライラするなどの訴えが聞かれた。

(3) 新学期スタート

中学部生徒は8名と少人数となり、新年度を迎えた。被災により落ち着かない生活であることに配慮して夏季休業前は学部行事を行わず、普段の学校生活を取り戻すことを優先に、生徒・保護者に寄り添った支援を進め、後期になってから日常の学校生活へ移行した。

- ① 落ち着いた学校生活
 - ◇通学手段・昼食の支援 ◇生徒の心理的解放
 - ◇行事の見直し ◇余震対応
- ② 体力づくり 【写真2, 3, 4,】
 - ◇体調不安の解消、自分の体への関心を高める
定期的な体重測定・ランニング サーキット運動
- ③ 保護者との心のケア
 - ◇支援情報の提供、実態把握アンケート
 - ◇仮設住宅への家庭訪問 防音・バリアフリー対策
 - ◇親子レク お茶会



【写真2】

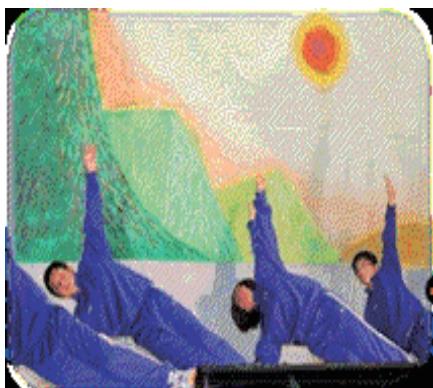


【写真3】



【写真4】

【写真2, 3, 4】体力づくり



【写真6】学習発表会 組体操

6月『京都風工房』の支援を受けて、本格的な染色体験【写真5】をした。生徒も職員も思う存分に刷毛を動かし、心理的解放感を味わい、笑顔を取り戻した。

9月末の宿泊学習では初めての目的地を県南地区とし、世界遺産『金色堂』を大きな感動とともに見学した。

10月末の学習発表会では、学習の成果として個性に応じた発表と組体操【写真6】を披露し、会場を感動の渦に巻き込んだ。

保護者は仮設住宅に入居しほっとしたが、以前の住まいとは大きく異なる環境に戸惑った生徒は、生活リズムの変調が見られ室内で奇声を上げたり、大きな物音を立てたりして、保護者の心労はピークに達した。担任は家庭訪問や休日の過ごし方など具体的に相談対応した。

学校として、仮設住宅に入居の保護者の健康状態や日常生活、住宅のことで心配なことを調査し、防音・バリアフリーなどについて関係機関へ要望した。また、同じ境遇の保護者のお茶会を開いた。お互いにいろいろ話すことにより、一人ではないという意識を持つことができた。保護者が笑顔や落ち着きを取り戻すに従って生徒も元気と落ち着きを取り戻してきた。

3 取組を終えて

今回の大震災で受けた被害や心のケアには、これから先何年もの月日をかけていかねばならない。生徒を取り巻く環境の変化に気を配って、常に心のケアを意識した支援を継続していくきたい。

保護者・生徒の笑顔こそが生徒の活力のもとであり、感動のある生活であることを確認して取り組んでいきたい。



【写真5】染色体験

【平成23年度スクールバス避難訓練実施について－震災後の取り組み－】

1 はじめに

本校での3月11日14:46は、小学部低学年は校地内にある学童の家への移動と保護者の迎え、小学部高学年と中学部は帰りの会、高等部は授業中の時間帯であった。地震発生時には、年間3回実施の避難訓練の成果があり本部からの放送を聞き、児童生徒、職員は落ち着いて一次避難、二次避難と対応することができた。下校スクールバスの出発時間は15:10のため、スクールバス移動中での震災でなかったことで、児童生徒、職員は被災を免れることができほっとしているところである。

しかし、スクールバス移動中で今回のような地震等（津波警報発令）の発生の場合、従来のマニュアルで安全な対応ができるのか見直しを図り、改めてスクールバス避難訓練を実施することとした。

この避難訓練については、今回の震災で見直しを行った部分を総合的に組み込み、実施することとした。

●見直し部分

- ・平成23年4月：緊急事態発生時（地震（震度5強）・津波警報発令時）の対応マニュアルを保護者配付
- ・平成23年11月：「安全と安心のためのお知らせサイト」立ち上げ
保護者連絡（活用のお知らせ）

2 取組の概要

(1) 実践名「スクールバス避難訓練」

(2) 目的

- ① スクールバス運行時に地震災害が発生した際の具体的な対応を訓練する。
- ② 本校の災害時ホームページ「宮古恵風支援学校安全と安心のためのお知らせサイト」の活用を訓練するとともに、保護者に体験してもらい、その浸透を図る。



【写真1】スクールバス緊急停止での安全確認の様子

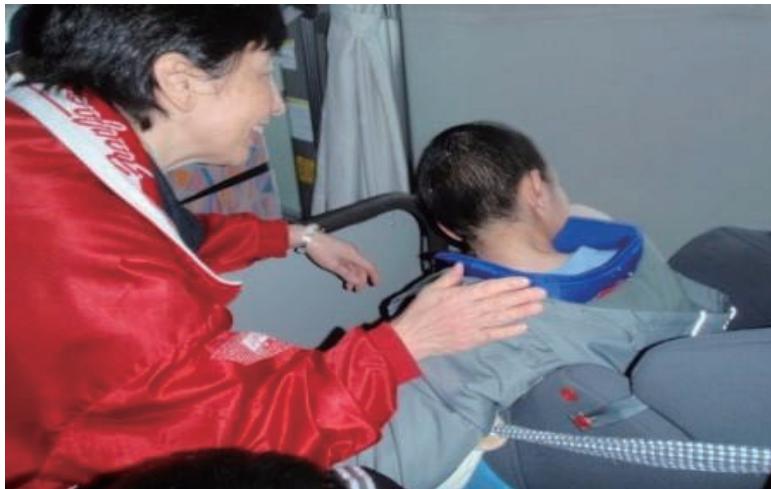
(3) 日 時

平成23年11月30日（水）14:20～15:20

(4) 訓練内容

- ① 下校バス運行時の緊急避難

- ② 緊急避難先での児童生徒の安全確保
- ③ 下校バス緊急避難先への職員応援派遣
- ④ 「お知らせサイト」への書き込み訓練（職員）
- ⑤ 「お知らせサイト」の読み取り訓練（保護者）
- ⑥ 通学生（バス利用）保護者への緊急連絡（職員）【模擬訓練】
- ⑦ 災害用伝言ダイヤルへの入電（職員）【模擬訓練】



【写真2】緊急避難時での児童対応の様子

（5）避難想定

11月30日 14:35 震度6弱の地震発生
14:45 岩手県沿岸部全域に津波警報発令
15:05 津波警報解除

今回の訓練については、児童生徒に対して事前指導を行い精神的不安を少なくした。

そのためか、当日の児童生徒の動きについては、みんな落ち着いていた。実際、宮古病院駐車場への避難となり、毛布の使用や病院トイレ利用等実際の場面に即した対応を行い、児童生徒は職員の指示に従って対応することができた。

職員にとって、実際に即した訓練であったので、不足している部分や改善を要する部分について多くの指摘があった。何よりも、職員一人一人の災害に対する危機意識が強まったと思われる。



【写真3】職員対応の様子（毛布、飲料水等の提供）

3 取組を終えて

上記の取り組みの他に、本校では災害時に主要道路が遮断された際の避難経路を確認するため、保護者も参加し3コースの迂回路実地踏査を実施した。

学校において「児童生徒の安全をどのように確保していったらよいか」という課題については、最悪を想定しながら一つ一つの事案を確認、解決していくことが大切であると実感している。学校、保護者、地域との繋がりにおいても、訓練等を繰り返す中でお互いの存在を確認することができている。

今後も関係機関との連携を密にしながら、危機管理意識の強化に努めたい。

【『祭りの秋』～神戸に響いた気仙太鼓の音～】

1 はじめに

本校は大船渡市内の高台に位置するため、東日本大震災津波において津波の被害を直接は受けなかつたが、地震の揺れにより校舎及び寄宿舎内の機械などに被害を受けた。

また、その日はインフルエンザにより高等部生徒全員が出校停止となっており、自宅において2名の生徒が津波の犠牲になった。また3名の生徒が保護者を失い、全校の約42%の生徒が自宅を失うなどの大きな被害を受けた。このように本校は本県の特別支援学校の中でも被害が大きかった。

のことから、岩手県内や全国各地の特別支援学校を始め多くの関係機関から支援物資や応援メッセージなどが次々に寄せられた。

特に神戸市立青陽東（せいようひがし）養護学校の生徒会からは、震災後直ぐに手紙や応援メッセージ、音楽CDなどを何度も送っていただき、本校生徒たちにとって心の励みとなった。

その後、本校生徒たちが徐々に平常の学校生活に戻って行く中で、青陽東養護学校生徒と本校生徒との手紙を通じた交流が始まった。

2 取組の概要

神戸市立青陽東養護学校との交流活動が続けられるうちに、本校2学年生徒たちの関西方面への修学旅行の中で、お互いに直接会って話しをしたいという要望が両校から出された。

そこで、11月29日から3泊4日で計画していた修学旅行の行き先を、当初の京都方面から神戸方面に変更し両校の交流会を開催することにした。また、修学旅行に参加する2年生の生まれた年が、偶然にも阪神・淡路大震災が発生した年もあることから、神戸の復興を祈念して始まった神戸ルミナリエを鑑賞できないか検討された。当初は修学旅行後に開催予定であった神戸ルミナリエの日程が、青陽東養護学校から事務局に粘り強く働きかけていただいたこともあって、ルミナリエの開幕が交流会当日の12月1日に変更され生徒たちは点灯式を鑑賞することができた。

（1）青陽東養護学校との交流会

12月1日に青陽東養護学校の体育館にて交流会が行われた。青陽東養護学校全校生徒188名と教師及び保護者を含め約300名の大拍手の中、手作りの花アーチを通じて本校修学旅行団26名が迎えられた。両校の代表生徒および教師代表の挨拶の後、初めに本校から気仙太鼓を披露した。使用する法被や手ぬぐいなどの衣装、笛やカネは、各生徒が修学旅行の荷物と共にそれぞれ持参した。

当初、計画の段階で和太鼓の準備が問題となつたが、青陽東養護学校の職員が市内を奔走し必要個数をなんとか集めてくださった。また、和太鼓を設置する台座は、生徒の身長や太鼓の大きさによって高さが異なるため、事前に寸法を連絡し各生徒に合わせて製作していただくなど細部まで配慮して準備していただいた。本校生徒たちは、今までの励ましや万全に準備していただいたことへの感謝の意を表し『祭りの秋』を、練習の時以上に見事に演奏することができた。



【写真1】神戸へ感謝の気仙太鼓

その後、青陽東養護学校からは保護者約30名のコーラスと高等部全員による素晴らしい全体合唱『あすという日が』が披露された。

その合唱の合間に行われた青陽東養護学校職員によるパフォーマンスと自己紹介ゲームでは参加者全員が盛り上がり、大変楽しい時間を過ごすことができた。

最後に、両校がそれぞれ作業学習の時間に製作した作業製品の説明と贈呈が行われ、お互いにプレゼントの交換の機会となった。本校の生徒の中には、感動と別れの悲しさから涙を流す女子生徒もいた。帰る際には生徒会全員と保護者、職員が校門に並び、私たちの乗ったバスが見えなくなるまで手を振って見送っていただいた。

滞在時間が2時間程度の短時間での交流会であったが、生徒たちは関西人特有の陽気さに触れることで元気をいただくことができた。また、本校からは今までの感謝の気持ちを届けると共に立派に立ち直った姿を見ていただくことができた。

(2) 神戸ルミナリエ見学

神戸ルミナリエ事務局の配慮により修学旅行団の見学席を確保していただき、間近で今年度初めての点灯の瞬間を見学することができた。

生徒たちは阪神・淡路大震災について事前学習したことにより、神戸の街が当時大きな被害を受けたことを理解していた。そのため自分たちと同様に被害を受けた街が、やがて光り輝く街に復興できたことを見ることができた。また、美しい光の世界に感動している神戸の人たちを見て、震災で心にダメージを受けた人たちも時間が経てばやがて元気になっていくことを、生徒たちは実感していた。



【写真2】光の芸術に興奮気味の生徒たち

本校の被災への青陽東養護学校からの応援メッセージにより始まった交流会ではあったが、両校の生徒及び教師の熱意によって大成功を収めた。今まで全国各地から支援や応援をいただけただけであったが、約9カ月が過ぎて元気になった姿を応援していただいた人たちに直接に見せることができたことは、本校生徒たちにとって大きな成果であった。

両校が遠く離れていることから、今後の交流活動を進めるにあたりいろいろな課題が生じてくると思われるが、今までと同様に手紙の交換などの機会を通しながら、今後も交流を深めていきたい。

3 取組を終えて

本校は、東日本大震災津波において人的被害及び物的被害を受けながらも3月11日からの18日間、本校生徒を対象とした福祉的な避難所となった。そのため、新年度が約半月遅れでスタートしたものの、その後の本校生徒および教師全員の努力により、現在はほぼ平常の学校生活に戻っている。

しかし、これからも大震災と同規模の余震の発生も予測されており安心できない状況である。そのため本校は有事の際には特別に支援が必要な生徒の避難所としての対応を今後も準備しており、食糧備蓄等を含め危機管理マニュアルの検討などを現在進めている。

これからも生徒及び教師が一丸となって、本校の元気な姿をアピールするとともに同じような辛い思いを二度としないよう準備していきたい。

釜石市立釜石東中学校

H23 防災（復興）ボランティースト －活動の様子－（関連p. 34）



【テーマ：片岸花壇整備】



【テーマ：応急処置】



【テーマ：仮設住宅訪問（血圧測定）】



【テーマ：復興キャリア体験】



【テーマ：夢を語る】

